

赤外線男

海野十三

青空文庫

この奇怪極まる探偵事件に、主人公を勤める「赤外線男」なるものは、一体全体何者であるか？ それはまたどうした風変りの人間なのであるか？ 恐らくこの世に於て、いまだ曾て認識されたことのなかった「赤外線男」という不思議な存在——それを説明する前に筆者は是非とも、ついこのあいだ東都に起つて、もう既に市民の記憶から消えようとしている一迷宮事件について述べなければならぬ。

これは事件というには、実にあまりに単純すぎるために、もう忘れてしまった人が多いようであるが、しかし知る人ぞ知るで、識しっている人にとっては、これ又奇怪な事件であることに、この迷宮事件が後になって、例の摩訶不思議まかふしぎな「赤外線男」事件を解とく一つの重大なる鍵の役目を演じたことを思えば、尚な更逸さらいつすることのできない話である。

なんかと云つて筆わた者たくしは、話の最初に於て、安やす薬やくの効能こうのうのような台辞せりふをあまりクドクドと述べたてている厚こう顔がんさに、自分自身でも夙とくに気付いているのではあるが、しかしそれも「赤外線男」事件が本当に解決され、その主人公がマスクをかなぐり捨てたときの彼のか大きな駭おどろきと奇妙な感激とを思えば、一見思わ

せたつぷりなこの言草も、結局大した罪にならないと考えられる。――

さてその日は四月六日で、月曜日だった。

ところは、大東京だいたうきようで一番乗り降りの客の多いといわれる新宿駅の、品川方面ゆきの六番線プラットホームで、一つの事件が発生した。

それは丁度ちようど午前十時半ごろだった。この時刻には、流石さすがの新宿駅もヒツソリ閑かんとして、プラットホームに立ち並ぶ人影も疎まばらであった。

あの六番線のホームには、中央あたりに荷物あ上げ下げ用のエレヴェーターがあつて、その周囲は嚴重なかこ囲いが仕切られて居り、

その背面には、青いペンキを塗った大きな木の箱があつて、これにはバケツだとかボロ布きれなどの雑品が入っているのだが、その箱の上を利用して新聞雑誌が一杯そば拵そげられ、傍そばに青い帽子を被かぶつた駅の売子が、この間に合わせながら毎日規則正しく開かれる店の番をしている。

このエレヴェーターとレールとの間のホームの幅はばは、やつと人がすれちがえるほどの狭さであるが、その通路にはエレヴェーターを背にして駅の明あいているうちは不思議にもきまつて、必ず一人の若い婦人が凭もたれているのだ。その婦人は電車の発着に従つて人は変るけれど、其その美しさと、何となく物淋ものしそうな横顔について、どの女性についても共通なのであつた。この神秘を知つ

ている若いサラリーマン達の間には、このエレヴェーター附近を「佐用媛の巖」と呼び慣わしていた。かの松浦佐用媛が、帰ってくる人の姿を海原遠くに求めて得ず、遂に巖に化したという故事から名付けたもので、その佐用媛に似た美しさと淋しさを持つた若い婦人がいつも必ず一人は居るというのであった。

その午前十時半にも確かに一人の佐用媛が巖ならぬエレヴェーターの蔭に立っていた。鶯色のコートに、お定りの狐の襟巻をして、真赤なハンドバッグをクリーム色の手袋の嵌った優雅な両手でジツと押さえていた。コートの下には小紋らしい紫がかつた訪問着がしなやかに婦人の脚を包み、白足袋にはフェルト草履のこれも鶯色の合わせ鼻緒がギユツと噛みついていて——そ

れほど鮮かな佐用媛なのに、そのひとの顔の特徴を記憶している者が殆んど無いという全くおかしな話だった。尤もホームは至つて閑散で、そんなことには超人的な記憶力をもっている若い男たちが、幸か不幸かその近所に居合わせなかつたせいにもよるだろう。そこへ上りの品川廻り東京行きしながわまわの電車がサツと六番線ホームへ入つて来た。運転台の硝子窓ガラスの中には、まだ昨夜の夢の醒めきらぬらしい、運転手の寝不足の顔があつた。

「呀ッ!!」

運転手は弾かれたように、座席から立ちあがつた。彼の面はサツと青ざめた。反射的にブレーキを掛けたが、もう駄目だった。

ゴトリ。……ゴトリ。……

車輪とレールとの間に、確かな手^{てごたえ}応があつた。あのたまらなくハッキリした轆^{れきおん}音が……。佐用媛がいきなりホームからレール目懸^{めが}けて飛びこんだのだ！

それから後の騒ぎは、場所柄だけに、大変なものであつた。

現場の落花狼藉^{らつかろうぜき}は、ここに記すに忍びない。その代り検視の係官が、電話口で本庁へ報告をしているのを、横から聴いていよう。

「……というような着衣^{ちやくい}の上等な点から云いまして、またハンドバッグの中に手の切れるような十円札^{さつ}で九十円もの大金があるところから考えましても、相当な家庭の婦人だと思ひます。……ああ、年齢^{とし}ですか。それがどうも明瞭^{めいりょう}でありませぬ。何し^{なん}

ろ、顔面かおを滅茶滅茶めっちゃめっちゃにやられてしまったものですからネ。しかし着物の柄がらや、四肢ししの発達はつたつぶりから考えますと、まず二十五歳前後というところでしようナ」

係官は何を思い出したものか、ここでゴクリと唾のを嚥のみこんだ。やがて鷲色のコートを着た轢死婦人れきしふじんの屍体したいは、その最期さいごを遂げた砂利場じやりばから動かされ、警察の屍体收容室に移された。いつもの例によれば、ここへ誰か遺族が顔色をかえて駆けこんでくるのが筋書すじがきだったが、どうしたものか何時いつまで経たつても引取人ひきとりが現れない。告知板こくちばんに掲示けいじをしてある外ほか、午後一時のラジオで「行路病者こうびようしゃ」の仲間に入れて放送もしたのであるが、更に引取人ひきとりの現れる模様がなかった。これだけの大した身なりの婦人で、引

取人の無いのは不思議 千^{せん}万^{ばん}だと署員が噂^{うわ}さし合っているところへ、待ちに待った引取人が現れた。それは轢^れ死^し後^ご、丁^ち度^{よう}十四^ど時間ほど経った其の日の真夜中だった。

それは隅^{すみ}田^だ乙^お吉^とと名乗る東京市中野区の某^{ぼう}料理店主だった。

彼はそんな商売に似合わぬインテリのように見うけた。警察の卓^て子^この上に拈^ひげ^ろられた数々の遺^い留^{りゅう}品^{ひん}を一つ一つ手にとりあげながら、彼はコンパクト一つにもかなり明瞭な説明をつけ加えた。

轢^{すえ}死人^{すえ}は彼の末^{すえ}の妹^{いもうと}だったのだ。

「このコンパクトですがネ、梅^{うめ}子^こ——これは死んだ妹の名前なのです、梅子はもう五年もこのコティのものを使っていましたよ。ごらんなさい。蓋^{ふた}をあけてみると、この乱暴な使い方はどうです。

あいつの性格そのものですよ。妹は今年二十四になりますが、どつちかというと不良ふりようの方でしてネ、それも梅子自身のせいというよりも私達同胞きょうたいもいけなかつたんです。何しろ兄や姉が、合わせて八人も居るのです。皆、相当楽に暮しているんです。梅子は末すえツ子でした。兄や姉のところをズーツと廻ると、あつちでもこつちでも「梅ちゃん」「梅ちゃん」とチヤホヤされ、「ほら、お小遣こづかいヨ」と貰う金も、十七八の少女には余りに多すぎる嵩かさでした。梅子は純真な子供心の向うままに、好きなことをやっていたうちに、とうとう不良になつちまつたんです。このごろでは流さ石すがの同胞たちも、梅子から持ちこまれる尻しり拭ぬぐいに耐たえきれなくなつて、何でもかんでも断ることにしていたのです。轢死をする

前の晩も私のところへ来ましたが、又金の無心です。これが最後だといので百円呉れてやったところ、素直に帰ってゆきました。そのときは、よもやこんな惨らしいことになろうとは思いませんでした。……なんですって、警察へ来ようが大変遅かったって、それはこうですよ。ちよつと私は商売のことで午後から出て居りまして帰りが遅かったものですから……」

顔面は判らぬが、髪かたちに、それから又身のまわりの品物などを一々肯定したので、轢死婦人は隅田乙吉の妹うめ子であると断定された。乙吉は幾度も係官の前に迷惑をかけたことを謝し、屍体は持参の棺桶に収め所持品は風呂敷に包んで帰りかけた。

「オイ隅田君、ちよつと待ち給え」司法係の熊岡という警官

が席から立ち上つて来た。

「はいッ」隅田乙吉は、手にしていた風呂敷包みを又卓子テーブルの上に置いて振りかえつた。

「君はこんなものを知らんか」

警官は掌ての上に、ヨーヨーを横に寝かしたような紙函かみばこを載せて、乙吉の方にさしだした。

「これは……？」乙吉の受取つたのは、よく鋤物こうぶつの標本ひょうほんを入れるのに使う平べったい円形えんけいのボール函ぼこで、上ガラスが硝子硝子になっていた。硝子の窓から内部なかを覗のぞいてみると、底にはふくよかな脱脂綿としめんの褥しとねがあつて、その上に茶つぽい硝子屑くずのようなものが散らばっている。

「判らんかネ」と警官は再び尋ねた。「これはセルロイドの屑なんだ。そして燃え屑なんだがネ」

「どこに御座いましたのですか」

「これは、君が今引取ってゆこうという轢死婦人のハンドバッグの隅からゴミと一緒に拾い出したのだ」

「さあ、どうも見当が付きませんが……」

どうやら隅田乙吉は、本当に心当たりがないらしかった。で、熊岡警官はそれ以上追究したり、また今とりつつある上官の処置に異議を挿もうという風でもなく、事実その問答はそこで終ったのであった。

隅田乙吉が屍体を守って中野の家へ帰ってゆくと、入れ違いに

新聞社の一団が殺到して来た。

「とうとう、新宿の轢死美人の身許が判つたてじやありませんか。誰だつたんです」

「自殺の原因は何です」

「全然素人じゃないという噂もありましたが……」

当直は、記者に囲まれたなり、ふかぶかと椅子の中に背を落とした。そして帽子を脱いで机の上に置くと、ボリボリと禿げ頭を搔いた。

「書きたてるほどの種じゃないよ。それに轢死美人でも顔が見えなくちやなア」

本気か冗談か判らぬようなことを云つて、アアと大欠伸び

た。記者連きしやれんもこんな真夜中に自動車を飛ばして駆けつけたことが、のつけからそもそもあやまの誤りだったような気がして、一緒に欠伸もよおを催したほどだった。

しかし、それから二十四時間後に、彼等は同じこの場所に、互たがいに血相けっそうをかえて「怪事件発生」を喚わめきあわねばならないなどは、夢にも思っていないなかったのである。

それから二十四時間ほど経った。

同じ警察署の夜更よふけである。今夜は事件もなく、署内はヒツツり閑かんとしていた。

そのとき署の玄関の重い扉を、外から静かに押すものがあつた。ギーツ、ギーツという音に、不ふ凶と気がついたのは例の熊岡警官だつた。彼は部厚ぶあつな犯はん罪ざい文ぶん献けんらしいものから、顔をあげて入口を見た。

「だツ誰かツ」

夜勤やきんの署員たちは、熊岡の声に、一いっ齊せいに入口の方を見た。しかし今しがたまでギーツ、ギーツと動いていた重い扉はピタリと停いつて巖いわのように動かない。

「うぬツ」

熊岡警官は席を離れると、ズカズカと入口の方へ飛んでいった。そして扉に手をかけると、グツと手前へ開いた。そこには外面の黒手のような暗闇ばかりが眼に映った。

「オヤー」

熊岡警官は、何を見たのか扉の間からヒラリと戸外に躍り出た。ボタンと扉はひとり手に閉まる。一秒、二秒、三秒……。空間も時間も化石した。

風船がパンクするように戸口がサツと開いた。

「さア、こつちへ這入れ！」

熊岡警官の怒号と諸共、黒インバネスを着た一人の男が転げ

こんできた。署員は総立ちになった。「何だ、何だッ」

昨夜とは違った当直の前にその男はひき据えられた。帽子を脱

いだその男の顔を見て、おどろ駭いたのは熊岡警官だった。

「なあーんだ。君は妹のれきしたい轢死体を引取って行った男じゃないか」

「うん、隅田乙吉だな」みし見識り越しの刑事も呻った。「どうしたのか」

たしかにそれは、隅田乙吉だった。昨夜の悠ゆうぜん然たる態度に似ず、非常に落着かない。何事か云いだしかねている様子だった。

「何故、僕を見て逃げようとしたのだ。署の戸口をとぐち覗うなんて、

何事かッ」

「いや申します、申上げます」熊岡警官の追ついきゆう窮に隅田はどう

とう声をあげた。「実は大変な間違いをやっちまったんです」

「うむ」

「昨夜この警察へ出まして、妹梅子の轢死体を頂戴いたして
 帰りましたが、まあこのような世間様に顔向けの出来ない死に様
 でございますから、お通夜も身内だけとし、今日の夕刻、先祖
 代々伝わって居ります永正寺の墓地へ持つて参り葬ったのでご
 ざいます」

「それから……」

「葬いもすみまして、自宅の仏壇の前に、同胞をはじめ一
 家のものが、仏の噂さをしあっていますと、丁度今から三十分
 ほど前に、表がガラリと明いて……仏が帰って来たのでございま

す」

「なにーッ、仏が帰つて来た？」警官の顔がサツと緊張した。いやな顔をして背中の方に首を廻した刑事もあつた。

「死んだ筈はずの梅子が帰つてきたんです。こりや、てつきり化けて出たのだと思ひ、一同しばらくは寄りつきませんでした。いろいろ観察したり押問答おしもんどうをしているうちに、どうやら生きている梅子らしい気がして来ました。そこで寄つてたかつて聞いてみますと、梅子のやつ情夫じょうふと熱海あつみへ行つていたというのです。それを聞いて同胞は、夢のように喜び合つたわけでございますが、一方に於おきまして、真まことにどうも……」と隅田乙吉は下を向いて恐れ入おそつた。

「莫迦ぼかな奴やつツ」と宿直しゆくぢくが呶鳴どなった。「では昨夜本署から引取って
いった若い女の轢死体れいじたいというのは、お前の妹ではなかったとい
うのだな」

「どうも何ともはや……」

「何ともはやで、済すむと思うかツ」宿直はあとでジロリと一座の
署員しやくいんを睨にらみまわした。昨夜の当直の名を大声で云つて、（馬鹿野
郎らう）と叩たたきつけた位くらいだった。他人の死骸しがいを引取って行つた奴も
奴なら、引取らした奴も奴である。

「昨夜この男がデスナ」と側かたわらの刑事が弁解べんげらしく口を挿はんだ。

「轢死婦人の衣類や所持品を一々点てん検けんしまして、これは全部妹
の持ち物に違ちがひない。このコンパクトがどうの、この帯おびどめがど

うのと本当らしいことを云っていったのです。ですから昨夜の当直も信じられたのだと思います」

「イヤまった全く、あれは本当なのです」と隅田乙吉がたまりかねて声をあげた。

「あれは出鱈目でたらめでなくて間違いないのです。妹のもの

に違いないのですが、さつき漂ひょうぜん然と帰宅した本物の妹も、あ

れと同じ衣類を着、同じハンドバッグや、コンパクトなどを持つ

ているのです。つまり同じ服装をし、同じ持ち物をした婦人が二

人あったという事になるので、これは私どもには不思議というよ

り外ほか、説明のつかないことなのです」

これを聞いていた一座は、ギクリと胸くぎに釘をうたれたように感

じた。どうやらこれは単純な轢死事件ばかりとは云えぬらしい。

「しかし隅田」と当直は口を開いた。「兎に角、お前は他人の屍体を処分してしまったことになるネ。あの轢死婦人の骨は持つてきたか」

「いや、それがです。実は火葬にしなかつたのです」

「火葬にしなかつた？」

「はい。私どもの墓地は相当広大でございまして、先祖代々土葬どそうということにして居ります。で、あの間違えたご婦人の遺骸いがいも、白木しらぎの棺かんに納めおさまして、そのまま土葬してございますような次第しだいです」

「ううん、土葬か」当直は、なあんだというような顔をした。

「では直ぐに掘り出して、本署へ搬はこんで来い。警官を立ち合わせ

るから、その指揮しきを仰あおぐのだ。よいか」

熊岡警官は、隅田乙吉について現場げんじょうへ出張することを命ぜられた。

どうも、粗忽そこつにも程ほどがあるというものだ。いくら独り歩きひとあるをさせてある妹だからといって、顔面かおが粉碎ふんさいしてはいるが、身体からだのその他の部分に何か見覚えの特徴があつたらうし、また衣類や所持品が同じだといつても、そんなに厳密に同じものがある筈はずがない。これは警察の方でも屍体しかばねを持てあまし、早く処分しゅぶんしたいと考えていたので、よくも検しらべず下さげ渡わたしたもので、引取人ひきとりの乙吉が生れつきの粗忽者であることを知らなかつたせいであると、当と直ちよくは断定した。そして熊岡警官が、婦人の屍体しかばねを掘りだして

くれば、再検査をすることによつて、どこの誰だか判明するだろうと考へた。

皆が出ていつてから時間が相当経つた。もう今頃は、隅田家の墓地へ着いて暗闇の中に警察の提灯ちようちんをふつているころだろう。掘りだした屍体がここへ帰つてくるまでには、まだ暇ひまがあつた。

今のうちに喰べるものは喰べて置かないと、たとい若い婦人にしても、顔面のない屍体を見ると食欲がなくなるだろうと考へて、当直は夜食やしよくの親子丼おやこどんぶりの蓋ふたをとつた。

ふたはし みはし 一箸、三箸つけたところへ、署外からジリジリと電話がかかつて来た。

「当直へ電話です」と電話口へ出た見習警官みならいが云つた。

「おお」当直は急いでもう一と箸、口の中に押しこむと、立つて卓子テーブル電話機をとりあげた。

「はアはア。……うん、熊岡君か。どうした……ええッ、なツなんだって？ 墓地を掘ったところ白木の棺が出た。そして棺の蓋を開いてみると、中は藻もぬ抜けの殻からで、あの轢死婦人の屍体が無くなっているツて！ ウン、そりや本当か。……君、気は確かだろうネ。……イヤ怒らすつもりは無かったけれど、あまり意外なのでねエ……じゃ署員を増派ぞうはする。しつかり頼むぞツ」

ガチャリと電話機を掛けると、当直は慌あわただしくホールを見廻した。そこには一いちだいじ大事勃ぼっぼっ発とばかりに、一いっせい斉にこつちを向いている夜勤署員の顔とぶつつかった。

「署員の非常召集だッ」

ピーツと警笛けいてきを吹いた。

ドヤドヤと階段を踏みならして、署員の下りて来る蹠音あしおとが聞えてきた。

当直は気がついて、喰べかけの親子丼に蓋をした。

——とうとう、本当の事件になってしまった。隅田乙吉の妹梅子に間違えられた轢死婦人は一体、どこの誰であるか。どうして、地下に葬った筈の屍体が棺の中から消え失せてしまったか。

熊岡警官が保管している「茶っぽい硝子ガラスの破片かけらのようなもの」は何であるか。何故それが、轢死婦人のハンドバッグの底から発見されたか。

さて筆者は、この辺でプロローグの筆を擱いて、いよいよ「赤
きが いせんおとこ
 外線男」を紹介しなければならない。

3

乙大学に附属しているラボラトリー 研究所に深山みやま 榎彦ならひこ という理学士が居
 る。この理学士は大学の方の講座を持ってはいないが、研究所内
 では有名の人物である。専攻しているのはオプティクス 光 学 であるが、
 事務的手腕もあるというので、この方のじんざいとほ 人材じんざいとほ 乏しい研究所の会

計方面も見ているという働き手であった。色は白い方で、背丈も高からず、肉附もふくらかであったので、何となく女性めき、この頃もてはやされるスポーツマンとは凡そ正反対の男であった。

深山理学士が目下研究しているものは、赤外線であった。

赤外線というのは、一種の光線である。人間は紫、藍、青、緑、黄、橙、赤の色や、これ等の交った透明な光を見ることが出来る。この赤だの青だのは、ラジオと同じような電波であるが、ラジオの電波よりも大變波長が小さい。そのうちでも紫が一番短く、赤は比較的波長が長い。長いといつても一センチメートルの千分の一よりもまだ短い。ラジオの波は三百メートルも四百メートルもあつて較べものにならない。

ところで光線と名付けられるものは、この紫から赤までだけではない。紫よりももっと波長の短い波があつて、これを紫外線とよんでいる。紫外線療法りようほうといつて、紫外線を皮膚にあてる、人体の活力はメキメキと増進ぞうしんすることは誰も知っている。一方、赤よりも波長の長い光線があつて、これを赤外線と呼んでいる。赤外線写真というのが発達して軍事を助けているが、山の頂上から向うの峠を目標めがけて写真をうつすにしても、普通の写真だとあまり明瞭めいりょうにうつらないが、普通の光線は遮り、その風景から出ている赤外線だけで写真をとると、人間の眼では到底見透いみとおしができない遠方までアリアリと写真にうつる。人間が飛行機に乗つて、千葉県ちばけんの霞ヶ浦かすみうらの上空から西南せいなんを望んだとす

ると、東京湾が見え、その先に伊豆半島が見える位が関の山だが、赤外線写真で撮すと、雲のあなたに隠れて見えなかった静岡湾を始め伊勢湾あたりまでが手にとるように明瞭に出る。

この紫外線も赤外線も、同じ光線でありながら、普通、人間の眼には感じない。つまり人間の網膜にある視神経は、紫から赤までの色を認識することが出来るが、紫外線や赤外線は見えないといえる。

見えないといえ、色盲という眼の病気がある。これは赤が見えなくて、赤い日の丸も青い日の丸としか感じない人達がいる。それは視神経の疾患で、生れつきのものが多い。ひどいになると、七つの色のどれもが色として見え、世の中がスクリーン

にうつる映画のように黒と灰色と白の濃淡にしか見えない気の毒な人がいて、これを全色盲ぜんしきもうと呼んでいる。軽い色盲でも、赤と青とが判別出来ないのであるから、うっかり円タクの運転をしていても、「進め」の青印と、「止れ」の赤印とをとりちがえ、大事故を発生する虞おそれがある。現に十年ほど前英えいこく国で、列車大衝突ようとうつの大椿事だいちんじをひきおこしたことがあつたが、そのときのぶつつけた方の運転士は、色盲しきもうだつたことが後に判明して、無期懲役の判決をうけたのが無罪になつた。人間の視力なんて、まことに不思議なものであり、又デリケートなものである。そして紫から赤までしか見えないなんて、貧弱きわまる視力ではある。

話が色盲の方へ道草をしてしまったが、この赤外線という光線

は、人間の眼に感じないとされているだけに、秘密の用をつとめるとして、ちようほう重宝さされている。甲賀三郎こうがさぶろう氏の探偵小説に「妖ようこ光殺人事件」というのがあるが、それに赤外線を用いた殺人方法が述べられている。それは赤外線警報器を変形したもので、殺そうという人の通路に赤外線を左の壁から右の壁へ、噴ふんすい水を横にとばしたように通して置くのだ。右の壁の中には光電管といつて赤外線を感じずる真空管のようなものが秘密に仕掛けてある。人の通らぬときは、赤外線がこの光電管に入つて電気を起こし、ピストルの引金をひっぱろうとするバネを動かさないように止めている。ところがもしこの廊下に人が通つて赤外線を遮さへぎると、どうなるかというのに、赤外線は人体で遮られ、光電管には今まで流れてい

た電気がハタと止るから、従つてピストルの引金を動かないようにおさにおさ圧えていた力がぬけ、即座そくざにズドンとピストルが発射され、その人間を斃たおす……という中々面白い方法だ。赤外線だから、その被害者の眼に見えなかつたので、仕方がない。

満洲の重要な橋きょうりよう 梁きょうの東橋きょうきやく 脚かから西橋脚の方へ向け、この赤外線を通し、西の方に光電管をとりつけ、光電管から出る電気で電鈴でんれいの鳴る仕掛しかけをおさ圧えておく。若もし匪賊ひぞくが出て、この橋脚に近づき、赤外線を遮さへぎると、直ちに光電管の電気が停るから、電鈴をおさ圧えていた力は抜け、電鈴はけたたましく匪賊襲しゅうらい来きを鳴り告げる。これも赤外線が見えないところを利用したものである。

深山^{みやま}理学士の研究問題は、この不可視^{ふかしこうせん}光線と呼ばれる赤外線が人間にも見える装置を作ることにあつた。彼は、これを近頃流行のテレヴィジョンに組合わすことに眼をつけた。

テレヴィジョンは、実験室に居て、その映写幕の上へ、例えば銀座^{きんざがいとう}街頭に唯今現に通行している人の顔を見ることが出来るといふ器械だ。これが室内の様子を見ると、写真撮影場で使うような眩^{まぶ}しい電灯を点じ、マネキン嬢の顔を強^{きやう}照^{しやう}明^{めい}することによつて、実験室でその顔を見ることが出来る。これが普通のテレヴィジョンであるが、それを赤外線^{せきがいせん}で照らすことにし、この実験室にうつし出そうというのである。

深山理学士は、あの奇怪な轢死^{れきし}婦人事件のあつた日と前後して、

この装置の製作にとりかかった。

それは丁度ちようど新学期であつた。この研究所内も上級の大学生や、大学院学生、さては助手などの配属の変更があつて、ゴツタがえしをしていた。

赤外線研究の彼の仕事も、従来は助手も置かず唯一人でやっていたが、今度は赤外線テレヴィジョン装置を作つたり、ロケーションにゆかねばならなくなることも判り切つていたので、助手が一人欲しいと予算を出したところ、元がんらい来経済難の乙大学なので、助手案は一も二もなく蹴けと飛ばされたが、その代り大学部三年の学生で、是非ぜひ赤外線研究をやりたいというひとがいるから、助手がわりにそれを廻そう、当分我慢して、それを使えという所長から

の話であつた。

それは四月のたしか十日か十一日の午前九時ごろだつた。深山理学士の研究室を外からコツコツとノックするものがあつた。

「ちよつと待つて下さい」

学士は室内から声をかけた。

五分ほど経つて、学士はやつと戸口に近づいた。

「まだ居ますか？」

みようと妙な、そしてどつちかという失礼きわまる質問の言葉を、

ドアへだ扉を距てて向うへ投げかけた。——学士の出てくるのに痺れしびをき

らして帰つてゆく人も多かつたので、こういうのが学士の習慣だつた。人を待たすことに一向頓とんじやく着やくしないのも有名なる学士の

習慣だった。

「はア——」

というような返辞へんじと、カタリと靴の鳴る音が、扉ドアの彼方あっちでした。学士はそこで渋しぶ々とポケットから鍵を出すと戸口の鍵孔かぎあなに入れ、ガチャリと廻して扉を開いた。そこには思いがけなくもピンク色のワン・ピースを着た背の高い若い婦人が立っていた。

「あ——」

「深山先生でいらつしやいませうか」若き女性は云った。

「そうです、深山ですが……」

「あたくし、理科三年の白丘しらおかダリアです。先生のところでは実習するようにと、科長かちようの御命令で、上りましたのですけれど」

「ああ、実習生。——実習生は、君だったんですか。じゃ入りなさい」

男の学生だと思っていたのに、やって来たのは、意外にも女学生だった。しかし何という逞たくましい女性なんだろう。近代の女性は、スポーツと洋装とのお蔭で、背も高くなり、四肢ししも豊かに発達し、まるで外国婦人に劣らぬ優秀な体格の持ち主になったという話だったが、それにしてもこの健康さはどうだ。これが女性というものなんだろうか。深山理学士は早くもこのピンク色の物体が発散はっさんするものに当惑とうわくを感じた。

「ダリアという名前だが」と学士は訊たずねた。

「失礼ながら君は混血児なのかい」

「まあ、いやな先生！」彼女は仰ぎょう山さんに臂ひじを曲げ腰をゆがめてカラカラと笑った。「これでも日本人としては、純種サラブレッドですよ」

「純種サラブレッドか！ イヤ僕は、君があまりにデカイもので、もしやと思ったんだよ」

「先生は、小さくて可愛いんですのネ」彼女は肥あった露らな二の腕を並行にあげて、取って喰うような恰かつ好こうをしてみせた。

そんなことから、先生の深山理学士と生徒の白丘ダリアとは、何でもずかずかと云い合う間あいだから柄がらになった。しかしこの少女が、まだ十八歳であるとは、学士の容易に信じかねるところであつた。赤外線研究室は、この先生と生徒とによつて、昼といわず夜と

いわず、乱雑にひっかきまわされた。精密な部分品が、さまざまの実験を経て一つ又一つと組立てられていった。二人の熱心さは大変なものだった。入口の扉にはいつものように鍵がかかっていた。食事を搬はこんでくるときと、白丘ダリアが夜更よふけて自分の住居へ帰るときの外は、滅多めったに開ひらかれはしなかった。深山理学士は独り者の気楽さで、いつもこの研究室に寝泊りしていた。

「アラ先生、まあ面白いことを発見しましたわ」ネジ廻しを握つて、器械のパネルに木ネジをねじこんでいたダリアが、頓とん狂きやうな声を張りあげた。

「どうしたんだい」深山学士は増幅器ぞうふくきの向うから顔を出した。

「とても面白いですわ。先生のお顔を右の眼で見たときと左の眼

で見たときと、先生のお顔の色が違うんですわ」

「変なことを云い出したネ」学士は自分の顔色のことを云われたので鳥渡ちよつといやな顔をした。

「右の眼で見たときよりも、左の眼で見たときの方が、先生のお顔が青つぽく見えますのよ」

「なアーんだ、君。色盲じゃないのか。ちよつとこつちへ来て、これを見給え」

学士はダリアを引っぱって、色盲検査図の前につれて来た。それは七色の水珠すいじゆが、円形えんけいに寄りあっているのだが、色の配列具合によつて、普通の視力をもっているものには「1」という数字が見える場合にも、色盲には「4」と見えたりするという簡単

な検査図だった。ダリアの眼を、片っぽずつ閉じさせて、沢山ある検査図を色々とめくって調べてみた。しかし結果はどういうことになったかというのに、ダリアは色盲ではないということが判明したのだった。

「色盲でも無いようだが……気のせいじゃないか」

「いいえ、気のせいじゃないわ。先生がどうかしてらっしゃるんじゃないかって？」

「莫迦ぼか云っちゃいかん。君の眼が悪いのだよ。説明をつけるところだ。いいかい。君の右の眼と左の眼との色の感度がちがうのだ。今の話だと、君の左の眼は、青の色によく感じ、右の眼は赤の色によく感ずる。両方の眼の色に対する感覚がかたよっているんだ。

それも一つの眼がんびよう病だよ」

「そうでしょうか、あたし困ったわ」と白丘ダリアは一向困つたらしい様子も見せずに云つた。「ンじや先生、あたしが今視みている右の眼の風景と、左の眼の風景と、どっちの色の風景が本当の風景なんでしょうか。どっちかの眼が本当のものを見て、どっちかの眼が嘘を視ているのですね」

「そりや困つた質問だ」と今度は深山理学士の方が本当に弱つてしまった。「どうも君の網もうまく膜まくのうしろに僕の眼をやってみることも出来ないからネ」

そういつて理学士は考え込んだ。

こんな調子で、二人はいつの間にか十年の知己ちきのようになって

しまった。

白丘しらおかダリアの入所にゅうしょ後はやくも五日のちには、赤外線テレヴィジョン装置がもう一と息で出来上るところまで漕こぎつけた。

ところが其その朝に限って、いつもなら午前七時には必ず出てくる筈はずの白丘ダリアが、十時になつても姿を現わさなかつた。学士は一人でコツコツと組立を急いでいたけれど、十一時になると、もう気きりよく力が無くなつたと見え、ペンチを機械台の上に抛ほうり出してしまった。

(どうして、白丘は出てこないんだらう?)

いろいろなことが、追つい懐かいされた。何か本気で怒り出したので

あろうか。それとも病気にでもなったのであろうか。考えているうちに、自分があの女学生に、あまりに頼りたよすぎていたことに気がついた。ひよつとすると、自分はもうあの少女の魔術にひつかかって、恋をしているのかも知れない。

(莫迦ばかなツ。あんな小娘に……)

彼は身体をひとゆすりゆすると、実験衣のポケットへ、両手をつつこんだ。ポケットの底に、堅いものが触れた。

「ああ、桃枝ももえから手紙が来ていたっけ」

今朝、用務員が門のところまで手渡してくれた四角い洋封筒をとりだした。発信人は「岡見桃助おかみとうすけ」と男名前であるが、それは桃枝の変名であることは、学校内で学士だけが知っていた。開いて

みると、どうやらそれは彼女の勤めているカフェ・ドランの丸卓テーブルの上で書いたものらしく、洋酒の匂いがしていた。文面は想像のとおり、彼の訪ねて来ないことを大変寂さびしがっていること、今夜にでも店の方にも、それともどつかで電話をかけて呼んで呉れば直ぐ飛んでゆくからというような、当人達でなければ読んでいるに耐たえないような文句が縷る々として続いていた。桃枝は学士の内妻ないさいに等しい情じょうじん人じんだった。彼は手紙を畳たたむと、ポケツトへねじこんだ。

(今日はいっそのこと、仕事をよして、これから桃枝を引張り出しにゆこう)

深山みやま理学士が実験衣を脱いで、卓テーブル子の上へポーンと抛ほうり出し

たときに、廊下にコツコツと聞き覚えた跫あしおと音がして、白丘ダリアがやつて来た。

「先生、先生」

扉ドアをあけてやると、ダリアは兎うさぎのように飛びこんできた。

「先生済すみませんでした。急用が出来たものですから……」

「一体どうしたというのです」深山理学士は桃枝のことなんか一時に吹きとばすように忘れてしまつて、真剣な面持おももちで聞いた。

「警視庁から呼ばれて、ちよつと行つたんですけれど……」

「なに、警視庁へ」

「あたしのことじゃないんですけど、伯父が呼ばれたんで、あたしも附おいてこいというので行つてたんです。伯母おばさんが一週間ほ

ど前に行方不明になったんで、そのことで行ったんですよ。随ずいぶ分ぶんこの事件、面白いのよ。ひとには云えないことなんです、ですけれど……」

ひとには云えないといいながら、白丘ダリアは、それこそ油紙に火がついたようにベラベラ事件を喋り出した。

簡単に云うと、失しつそう踪した伯母さんというのは二十六歳になるひとだった。伯父との仲も大層よかったのに、一週間ほど前に急に行方不明になってしまった。遺書でもないかと調べたが、何一つ書きのこされていなかった。全く原因が不明だった。

例の身許みもとの知れぬ轢死れきし婦人のことも、一度は問題になったが、着衣も所持品も違っていた。といって外ほかに年齢の点で似合わしき

自殺者もなかった。生か死かも判然しなかった。伯父は搜索につかれ切つて半病人になつてしまつた。そこへ警視庁から重ねての呼び出しが来たので今朝、姪めいのダリアを介添かいぞえに桜田門さくらだもんへ行つたというのだ。

本庁では、伯父に対して、どんな些細ささいなことでもよいから、夫入について腑ふに落ちかねることが今までにあつたならそれを話してみろということだつた。

伯父は暫く考えていたが、ポンと膝を打つた。

「そういえば思い出しましたが、妻あれの居るときに、妙な質問を私にしたことがありますよ。江戸川乱歩えどがわらんぽさんの有名な小説に『陰いん獣じゅう』というのがありますが、あの内容なかに紳商しんしょう 小山田夫人おやまだふじん

静子しずこが、平田一郎ひらたという男から脅迫きょうはくじょう状じょうを毎日のように受ける件があります。その脅迫状の内容というのは、小山田氏と静子夫人の夫婦としての夜の生活を、非常に詳細しやうさいに書き綴つづつてあるのです。それは夫妻ならでは絶対に知ることのない内緒ないしよごとでした。それにも係かかわらず、平田一郎という陰險いんけんな男は、一体どこから見ているのか、実に詳くわしく、実に正確に、夫婦間の秘事ひじを手紙の上に暴露ばくろしてある。——この脅迫状のことを、私の妻が突然話題にしたのです。江戸川さんの小説では、この気味の悪い手紙の主は、実は平田とかいう男ではなくて、小山田夫人静子その人だった。夫人の変態性へんたいせいがこの手紙を書かせ、夫との夜の秘事しげきに異常な刺戟しげきを与えたというのでした。——私の妻あれは、最後に

こんなことを訊きいたことを覚えています。『このような脅迫状が、静子さん自身の手によつて書かれたわけなら、静子さんは別に何とも恐ろしくはなかつた筈はずです。しかしもしあの手紙が、本当に見も知らない人の手によつて書かれたものだったとしたら、静子夫人の駭おどろきは、どんなだったでしょうね』と、まあこんな意味のことを云つたことがあります。私は莫迦ぼかなことを云いだす奴じやのうと、笑つてやつたんです。しかし今となつて思えば、あれも失踪の謎をとく一つの鍵のような気がしてなりません」

係官は、伯父の話に大變興味を持つたようだった。二人がもう席を立とうというときに一人の警官が円まるい小箱こばこをもつて来て、これに何か見覚えがないかと差し出した。それは茶色の硝子屑ガラスくずの

ようなものであつた。勿論もちろん二人には思いもよらぬ品物だつた。

「こんなになつてゐるから判らないかもしれないが」と其の警官が云つた。「これは映画のフィルムなんですよ。しかもそのフィルムが燃ねん焼しょうを始めたのを急にもみ消したとでも云いませうか、フィルムの燃え屑なのです。それでも心当りがありませんか」それは二人にとつて更さらに見けん当とうのつかないことだつた。話はそれまでとなつて、白丘ダリアと伯父とは、警視庁を辞去じきよした、というのであつた。

「一体その伯父さんというのは、何という方なのかネ」学士が尋たずねた。

「黒河内尚網くろこうちひさあみ」といふ是れでも子爵ししやくなのですよ。伯母の子爵夫

人というのは、京子といたしました」

「黒河内京子——君の伯母さんか」

「先生、伯母をご存知ですの」

「なアに、知るものかネ」学士は強く首を左右に振った。「さあ、今日は遅れたから、急いで組立てにとりかかろう」

そういつて深山理学士は実験衣を拾いあげると、洋服の袖そでをおした。そのときポケットから、四角い封筒がパラリと床の上に落ちたのを、学士は気付かなかつた。

ダリアの眼は悪戯いたずらもの者らしく爛らんらん々と輝いた。太い腕が、その封筒の方へニユーツと延びていった。

「赤外線男というものが棲んでいる！」

途方もない「赤外線男」の存在を云い出したのは、外ならぬ深山理学士だった。それは苦心の赤外線テレビジョン装置が組上つてから二日ほど後のことだった。

大胆といおうか、気が変になったといおうか、深山理学士の発表に駭いたのは、学界の人達ばかりだけではなかった。逸早く帝都の諸新聞紙はこの発表をデカデカの活字で報道したものだ

から、知ると識らざるとを問わず、どこからどこの隅々まで、

一大センセイションが颯風の如く捲きあがった。

「赤外線男というものが棲んでいるそうだ」

「そいつは、わし等の眼には見えぬというではないか」

「深山理学士の何とかという器械で見ると、確かに見えたというではないか」

などと、人の噂は千里を走った。

なにが「赤外線男」だ？

深山理学士の言うところによれば斯うだ。

「予はかねて学界に予告して置いた赤外線テレヴィジョン装置の組立てを、此の程完成した。これは普通のテレヴィジョンと殆ん

ど同じものだが、変っている点は、赤外線だけに感ずるテレヴィジョンで、可視光線は装置の入口の黒い吸収硝子きゆうしゆうガラスで除いて、装置の中には入れない。だから徹頭徹尾てつとうてつび、赤外線しか映らないテレヴィジョンである。

「予はこの装置の完成するや、永い間の欲望を何よりも早く達したいものと思ひ、装置を使つて、研究所の運動場の方向を覗くのぞことにした。折から夕刻だった。肉眼では人の顔も灰暗ほのくらくハツキリ見別けのつかぬような状態であつたが、この赤外線テレヴィジョンに映るものは、殆んど白昼はくちゆうと変らない明るさであつた。それは太陽の残光ざんこうが多量の赤外線を含んで、運動場を照しているせいに違ひなかつた。勿論画面の調子から云つて、吾人ごじんが既に

充分に知っている赤外線写真と同じで、たとえば樹々の青い葉などは雪のように真白まつしろにうつつて見えた。なんとこの驚くべき器械みりよくの魅力であるか。

「しかしこれは真の驚きではなかった。後になって予を発病に近
いまでに驚倒きょうとうせしめるものがあるとは、今日の今日まで考
えたことがなかった。それは実に、吾人がいまだ肉眼で見たこと
のなかった不思議な生物が、この器械によつて発見されたことで
ある。それは確かに運動場の上をゴソゴソと匍はいまわっていた。
予は眼のせいではないかと、器械から眼を離し、肉眼でもつて運
動場を見たが、そこにはその影もない。これはと思つて、赤外線
テレビジョン装置を覗のぞいてみると、確かに運動場のテニスコー

トの棒ぐいの傍に、動いているものがあるのだ。その内に、彼^かの生き物は直^{ちよくりつ}立^つした。それを見ると驚くべし、人間である。しかも日本人の顔をした男である。背は相当に高い。がっちり肥^こえている。なんか真黒な洋服を着ているようだ。鳥^{ちよつと}渡^と悪魔のような、また工場の隅から飛び出してきた職工のような恰好である。それほどアリアリと眺^{なが}められる人の姿でありながら、一度元の肉^に眼^{くがん}にかえると、薩^{さつぱ}張り見えない。赤外線でないと一向に姿の見えない男——というところから、予はこの生物に『赤外線男』なる名称をつけたと思う。

しかし残念なことに、やがてこの『赤外線男』はこつちに気がついたものと見え、キツと齒をむいて怒ったような顔をしたかと

思うと、ツツーつと逸走いつそうを始めた。そしてアレヨアレヨと云う裡うちに、視界の外に出てしまった。駭おどろいてテレヴィジョン装置のレンズを向け直したが、最早もはや駄目だった。しかし兎とも角かくも、予は初めて『赤外線男』の棲すんでいることを知った。われ等人間の肉眼では見えない人間が棲すんでいるとは、何という駭おどろくべきことだ。そしてまあ、何という恐ろしいことだ」

みやま深山理学士の発表は、大体こんな風の意味のものだった。

「赤外線男」という名詞で、一つの流行語になってしまった。帝都の市民は、この「赤外線男」が今にも自分の身近みぢかに現われるかと思つて戦々せんせん恟々きょうきょうとしていた。

そのうちに、ボツボツ「赤外線男」の仕業しわざと思われることが、

警視庁へ報告されて来るようになった。

郊外の文化住宅の卓^{テーブル}子の上に、温く湯気^{ゆげ}の立ち昇る紅茶のコップを置かせてあったが、主人公がさア飲もうと思つてその方へ手を出すと、これは不思議、紅茶が半分ばかり減つていた。これはきつと「赤外線男」が忍びこんでいて、グーツとやつたんだらうというような話もあった。

ギンザ、ダンスホールの夜更^{よふ}け。ジャズに囃^{はや}されて若き男と女とが踊り狂つている。そのときアブれて、壁^{かべ}際の椅子にしよんぼり腰をかけていた稍^{やや}々^{としま}年増のダンサーが、キヤーツと悲鳴をあげると何ものかを払いのけるような恰好をし、駭^{おどろ}いてダンスを止^やめて駈^たけよる人々の腕も待たず、パツタリ床の上に仆^{たお}れてしまつ

た。ブランデーを与えて元気をつけさせ、さてどうしたのかと尋ねてみると、彼女が椅子にかけているとき、何者とも知れず急にギョツと身体を抱きすくめた者があつたというのだ。目を瞠つているが、人影も見えない。それなのに、ヒシヒシと肉体の上に圧力がかかってくる。これは赤外線男に抱きつかれたんだと思うと急に恐ろしくなつて、あとは無我夢中だつたという。——何が幸になるか判らないもので、「赤外線男」に抱きつかれたダンサーというので、いままでアブレ勝ちだつたのが急に流行つ兎になつて、シートがぐんぐん上へ昇つていった。

こうなると何事も、暗闇だからといって安心してするわけにはゆかなかつた。何時赤外線男にアリアリと覗かれてしまふか知れ

なかつたのである。

これに類する報告は、日一日と殖ふえていった。しかし赤外線男のすることが、この辺の程度なら、それは悪戯いたずらこぞう小僧又は軽い痴ち漢かんみたいなもので、迷惑ではあるけれど、大して恐ろしいものではない。いやひよいとすると、それ等の小事件は赤外線男に対する疑心暗鬼ぎしんあんきから出たことで、本当の赤外線男の仕業ではないのじやないか。或いは赤外線男といわれるものも、深山理学士の錯さつ覚かくであつて始めから赤外線男なんて、居はないのじやないか。こんな風に、赤外線男に対する期待外れははずを口にする人も少くはなかつた。

だがしかし「赤外線男」否定党が大きな顔をしていられるのも、

永い時間ではなかつた。ここに突とつじよ如として赤外線男の魔手ましゆは伸まび、帝都全市民の面おもては紙のように色を喪うしなつて、「赤外線男」恐きよう怖ふしやう症かかに罹かからなければならなくなつた。——それは赤外線男発見者の深山理学士の研究室が不可解な襲しゆうげき撃げきをうけたことだつた。

これは午前二時前後の出来ごとだつたけれど、警視庁へ報告されたのはもう夜明けの五時頃だつた。場所が場所であるし、赤外線男の噂うわさの高い折柄おりからでもあつたので、直ただちに幾野捜査課長いくの、雁かりがね金検事なかがわよしんはんじ、中河予審判事等、係官一行が急行した。

取調べの結果、判明した被害は、深山研究室の扉ドアが破壊せられ、あの有名なる赤外線テレビジョン装置が滅茶滅茶に壊こわされてい

るばかりか、室内のあらゆる戸柵とだなや引出しが乱雑かまわに搔かき廻まわされ、あの装置に関する研究記録などが一枚のこらず引裂かれて、というひどい有様ありさまだった。

襲撃されたところは、もう一ヶ所あった。それは深山研究室に程近い研究所の事務室だった。ここでも同じ様な狼藉ろうぜきが行われているのみか、壁の中に仕掛けられた額がくのうしろの隠かくし金庫が開かれ、現金千二百円というものが盗まれてしまった。

さて当の深山理学士は、当夜例とうやのとおり、研究室内に泊つていた筈だが、どうしていたかと云うと、赤外線男のために、もろくも猿轡さるぐつわをはめられ両手を後うしろに縛しばられて、室内にあつた背の高たかい変圧器のてっぺんに抛ほうりあげられて、パジャマ一枚で震ふるえてい

た。これを発見したのは係官の一行だった。

「この事件を真ま先つ先に発見したのは、誰かネ」

と幾野捜査課長は、走はせ集った研究所の一同を見廻みまわしていった。

「儂わしでございます」年寄の用務員が云った。「儂は每晚研究所を見廻みまわっている役でございます」

「発見当時のことを残のらず述べてみなさい」

「あれは午前二時頃だったかと思いますが、見廻みまわりの時間になりましたので、懐中電灯をもって、夜番よばんの室から外に出ようと思いますと、気のせいか、どつかで物を壊こわすようなゴトゴトバリバリという音がします。どうやら深山研究室の方向のように思いまし

た。これは火事でも起つたのかと思ひ、戸口を開けて闇の戸外へ
 一步踏み出した途端とたんに、脾腹ひばらをドスンと一つきやられて、その儘まま
 何もかも判らなくなりました。大變寒いので気がついてみますと、
 もう夜は明けかかり、儂わしは元の室の土間どまの上に転ころがつていてるとい
 う始末しまつ。それから駭おどろいて窓から外へ飛び出すと、門衛もんえいのいます
 ところまで駈かけつけて、大變だと喚わめきましたようなわけです」
 「すると、お前が脾腹をやられたとき、何か人の形は見なかつた
 か」

「それが何にも見えませんでした」

「序ついでに聞くが、お前は赤外線男あかりおとこというのを聞いたことがあるか」

「存じて居ります。昨夜のあれは、赤外線男でございましたし

ようか」老人は急に臆気がついてブルブル慄え出した。

課長は、用務員を下げると、今度は深山理学士を呼び出した。

「昨夜、貴方の襲撃された模様をお話し下さい」

「どうも面目次第もないことですが」と学士はまず頭を搔いて

「何時頃だったか存じませぬが、研究室のベッドに寝ていた私は、

ガタリといふかなり高い物音に不図眼を醒してみますと、どうで

しょうか。室の入口の扉の上半分がポツカリ大孔が明いていま

す。これは枕許のスタンドを点けて寝るものですから、それ

で判ったのです。私は吃驚して跳ね起きました。すると、あの

赤外線テレビジョン装置がグラグラと独り手に揺れ始めました。

オヤと思う間もなく、装置の蓋が呀ツという間もなく宙に舞い上

り、ガタンと床の上に落ちました。私が呆然ぼうぜんとしていますと、今度はガチャーンと物もの凄すごい音がして、あの装置が破裂したんです。真空管しんくうかんの破片はへんが飛んできました。大きな廻転盤が半分ばかりもげて飛んでしまう。つづいてガチャンガチャンと大きなレンズが壊こわれて、頑がんじょう丈なケースが、薪まきでも割るようにメリメリと引裂かれる。私は胆きもを潰つぶしましたが、ひよつとすると、これはこの装置で見たことのある赤外線男ではないかしらと考えると、ゾーツとしました。見る可べからざるものを視た私への復讐ふくしゅうなのではないかしらと思いました。私はソツと逃げ出し、室の隅ツこにでも隠れるつもりで、寢床ねどこから滑り下りすべりようとするところを、ギユツと抱きすくめられてしまいました。それでいて身の周りにまわ

は何の異変もないのです。しかし身体の自由は失われて、恐ろしい力がヒシヒシと加わり、骨が折れそうになるので、思わず『痛い、助けて呉れ』と怒鳴りました。ところがイキナリ、ガンと頭へ一撃くつてその場へ昏倒してしまつたのです。それから途中、全然記憶が欠けているのですが、イヤというほど横ツ腹に疼痛を覚えたので、ハツと気がついてみますと、私は妙なところに載っているのです。それが先刻、皆さんから降ろしていただいたあの背の高い変圧器の上です。口には猿轡を噛ませられ、手は後に縛られ、立ち上ることも出来ない有様です。下を見ると、これはどうでしょう。奇々怪々な光景が悪夢のように眼に映ります。実験戸棚の扉が、風にあおられたように、パターンと開く、

すると柵たなに並べてあつた沢山の原書げんしょが生き物のようにポーンポーンと飛び出してきては、床の上に落ちる。引出しが一つ一つ、ヒヨコヒヨコ脱け出して飛行機の操縦のようなことをすると、中に入っていた洋紙ようしや薬品の小壘こびんなどが、花火のように空中に乱舞する。いやその化物屋敷のような物凄い光景は、正視せいしするのが恐ろしく、思わず眼を閉じて、日頃と唱えたこともなかつたお念ねんぶつ仏を口誦くちずさんだほどでした」

理学士は、そこで一座の顔を見廻わしたが、憐愍れんびんを求めめるように見えた。

「それから、どうしたです」課長なは尚も先うながを促した。

「それからです。室内の騒ぎが少し静まると、こんどは、壊こわれた

戸口がガタガタと鳴りました。何だか廊下にあしおと登音がして、それが遠のいてゆくように聞えました。すると間もなく、向うの方で大きな響ひびきがしはじめました。掛矢かけやでもって扉を叩き割るような恐ろしい物音です。それは今から考えてみますと、どうも事務室の入口のように思われました。その物音もいつしか消えて、こんどは又別の、ゴトンゴトンという音にかわり、何となく小さい物を投げつけているように思いましたが、それも五分、十分と経たつうちに段々静かになり、廳やがて何にも聞えなくなりました。私は赤外線男がまだ此の室へ引返してくるのではないかと、気たましいも魂も消し飛ばしてガタガタふる慄ふるえていましたが、幸さいわいにもその後、別に異変も起らず、やっと我れに返ったようなわけでした。いや何と申して

よいか、あのように恐ろしいと思つたことはありませんでした」

そういつて深山理学士は、大きい溜息ためいきをついたのであつた。

「君は、そのとき、何か扉ドアの閉るような物音をききはしなかつたかネ」と課長が尋ねた。

「そうです。そういえば、登音あしおとらしいものが空虚な反響はんきようを

あげて、トントンと遠のくように思いましたが、別に扉がギーツと閉まる音は気がつきませんでした」

「ふふん、それはどうも……」課長は低く呻うなつた。

「どうでしょうか、ちよつとお尋ねしますが」と事務員の一人がオズオズと進み出でた。「今の深山先生みやまのお話では、赤外線男が、この建物から扉を閉めて出て行つた様子がございますが、そう

しますと、赤外線男はまだこの建物の中でウロウロしているの
でございましょうか」

「そりや判らんね」と太った刑事が云った。「この辺にウロウロ
しているかも知れないが、また一方から考えると、赤外線男が建
物から出てゆくときにや、別に所長さんに叱られるわけではない
から、君のように必ず扉をガタンと閉めてゆくとは限らないから
ナ」

そのとき一人の刑事と何か囁き合っていた雁金検事が、捜査課
長の肩をつつついた。

「君、一つ発見したよ。この室の戸棚の隅に大きな靴の跡があつ
たよ」

「靴の跡ですか」

「そうだ。これはちよつと変つている大足だ。無論、深山理学士のでもないし、またこれは男の靴だから、この室のダリア嬢のものでもない。寸法から背丈を計算して出すと、どうしても五尺七寸はある。それからゴムの踵かかとの摩滅まめつぐ具合から云つてこれは血氣けつき盛かんな青年のものだと思ふよ」

「検事さん、待つて下さい」と捜査課長は慌あわて氣味きみに云つた。

「その足跡は果して犯人ののでしょうか、どうでしょうか」

「それは勿論もちろん、いまのところ戸棚の隅にあつたというだけのことさ」

「それにですな、赤外線男というのは、眼に見えない人間なんじ

やないですか。その見えない人間が、足跡を残すというのは滑こっけ稽いじゃないでしようか」

「しかし君」と検事も中々負けてはいなかった。「深山君の報告によると、赤外線男はこの運動場を人間のような恰好して歩いてきたというぞ。してみれば、赤外線男とて、地球の重じゅうりよく力をうけて歩いているので、空中を飛行しているわけではない。だから身体は見えなくても、大地だいちに接するところには、赤外線男の足跡が残らにやならんと思うよ」

「足跡が見えるなら、靴も見えたっていいでしょう。すくなくとも、靴の裏は見えたっていいわけです。そこには我々の眼に見える泥がついているのですからね」

課長と検事とは喋っていないながらも、この難問題が自分たちの畠はたけではないことに気がついた。

「ねえ、君」と検事が鼻に小皺こじわをよせて囁ささやくように云った。「これはどうも俺たちの手にはおえないようだよ。第一、知識が足りない」

「そうですヨ」と課長も苦笑した。

「仕方がないから、これは一つ例の男を頼むことにしてはどうかネ。帆村ほむら荘六そうろくをサ」

「帆村君ですか。実は私も前からそれを考えていたのです」

二人の意見は直ぐに纏まとまった。そして新あらたに呼び出されるべき帆村荘六という男。これはご存知の方も少くはないと思うが、素人探

偵として近頃売り出して来た青年で、科学の方面にも相当明るいという人物だった。

こうして取調べも一と通り終り、報告書も作られたけれど、直接の被害の中にととう洩れてしまった一つの重大なる品物があった。それは深山理学士が戸棚の中に秘蔵ひぞうしていた或る品物だったが、彼はそれを係官に報告しなかった。それは決して忘れたわけではなくて、故意こいに学士の心に秘ひめたものと思われる。一体、その品物はどんなものだったか。

とにかく深山学士研究室の襲撃事件によりて、赤外線男の生せいた態たいというものが、大分はつきりしてきた。

帆村探偵を交まぜた係官の一行が、深山理学士の研究室を訪ねたのは、新しい赤外線テレビジョン装置が出来上つたという其その日の夕刻のことだった。折せ角かく作くつた一台は、無む惨ざんにも赤外線男の破壊するところとなり、学士も助手の白しら丘おかダリアも大いに失望したが、その筋すじの希望もあつて、二人は更さらに設計をやり直し、新しい装置を昼ちゆう夜や兼けん行こうで組立てたのだった。白丘ダリアは、この事件以来というものは、住じゆう居きよにしている伯父おじ黒河内子くろこうちし

爵やくのところへ帰ってゆくことをやめ、深山研究室の中にベッドを一つ置き、学士と共に寝起きすることとなつた。碌ろくに睡眠時間もとらないで、この組立に急いだ結果、四日という短い日数にっすうのうち、新しい第二装置ができた。しかし学士はあの事件以来、何とはなく大変疲れているようであつた。その一方、白丘ダリアは益々ますます健康に輝き頸くびから胸へかけての曲線といい、腰から下の飛び出したような肉塊にくかいといい、まるで張りきつた太い腸ち詰ようづめを連想れんそうさせる程だつた。従つて第二装置の素晴らしい進行速度も、ダリアの精せい力りよくに負うところが多かつた。

研究室の扉ドアをコツコツと叩くと、直ぐに応こたえがあつた。入口が奥へ開かれると、そこへ顔を出したのは、頭に一杯繃ほうたい帯をして、

大きな黒眼鏡をかけた若い女だった。先登せんとうに立っていた課長は、

(これは部屋が違ったかナ)

と思つた位だった。

「さあ、皆さんどうぞ」

そういう声は、紛れもなくまぎ白丘ダリアに違いなかつた。どうしてこんな繃帯をしているのだろう。それに黒眼鏡くろめがねなんか掛けて……と不思議に思つた。

一行中の新顔しんがおである帆村探偵が、深山みやま理学士と白丘ダリアとに、先まず紹介された。

「いや、ダリアさんですか、始めまして」と帆村は慇懃いんぎんに挨拶をして「その繃帯はどうしたんです」と尋ねたたず。

課長はこの場の様子を見て、いつもながら帆村の手廻しのよいのに呆れ顔あきだった。

「これですか」少女はちよつと暗い顔をしたが「すこしばかり怪け我がをしたんですの。繃帯をしていますので大変にみえますけれど、それほどでもないのです」

「どうして怪我をしたんですか」

「いいえ、アノいっさくぼん一昨晚、この部屋で寝ていますと、水素乾燥用の硫りゆうさん酸の壇が破裂をしたのです。その拍ひょうし子に、柵たなが落ちて、上に載のっていたものが墜ついろく落して来て、頭を切ったのです」

「そりや大変でしたネ。眼にも飛んで来たわけですか」

「何しろ疲れていたもので、直すぐ起きようと思っても起き上れな

いのです。先生は直ぐ駈けつけて下さいましたけれど、あたくしが、愚図愚図ぐずぐずしているうちに、頭髪かみについていた硫酸らしいものが眼の中へ流れこんだのです。直ぐ洗ったんですが、大変痛んで、左の眼は殆んど見えなくなり、右の眼も大変弱っています」

ダリアは黒眼鏡を外して見たが、左眼さがんはまるで茹ゆでたように白くなり、そうでないところは真赤に充血じゅうけつしていた。右の眼はやや充血じゅうけつしている位でまず無事な方であつた。

「全く危いところでしたよ。連日れんじつの努力で、もう身体も頭脳あたまも疲れ切つています。神経ばかり、高ぶりましてネ」と理学士も側そばへよつて来て述じゆつかい懐かいした。彼の眼の色も、そういえば尋じんじ常ようでないように見えた。

「もすこしで、どうかになるところでしたわ。そうだったら、今日は実験を御覧に入れられませんかでしたでしょう」

ダリアは独り言のように云った。

一同は此の室に何だか唯ならぬ妖気が漂っているような気がした。

「じゃ、いよいよ働かせて見ます」と深山学士は立ち上った。

「白丘さん。カーテンを閉めてすっかり暗室にして呉れ給え」

「はい、畏りました」

ダリアは割合に元気に窓のところに歩みよつては、パタンパ

タンと蝶番式にとりつけてある雨戸を合わせてピチンと止

め金を下ろし、その内側に二重の黒カーテンを引いていった。窓

という窓がすっかり閉ってしまおうと、室内には桃色のネオン灯とうが一つ、薄ボンヤリと器械の上を照らしていた。隅すみによつていた幾野捜査課長、雁金検事、中河予審判事、帆村探偵、それから本庁の警部一名と刑事が二名、もう一人、事件の最初に出て来た警察署の熊岡警官と、これだけの人間が灯ひの下へゾロゾロと集つてきた。

「これは君、暗いネ」課長はすこし暗さを気にしていた。

「何だか、頭の上から圧おさえられるようだ」そういったのは白髪はくはつの多い中河予審判事だった。

「このネオン灯とうも消します。そうしないと巧うまく見えないのです」
深山が云った。「しかしスイッチは、ここにありませんから、仰お

つしゃ
有つて下されば、いつでも点けます」

「待つてくれ、待つてくれ」と雁金検事が悲鳴に近い声をあげた。
「どこに誰がいるやら判らないじゃないか。よオし、諸君はとりあえずこつちに立つていて呉れ給え。僕たちは、この椅子に腰を掛けていることにしよう」

幹部だけが、スクリーンを包围ほういして、椅子に席をとつた。

「いいですか」

「いいよ」

パツとネオン灯は消えた。すると一尺四角ばかりのスクリーンの上に、朧おぼろげ気な映像があらわれた。

「馬鹿に暗いネ」と課長が云つた。

「ピントが外れてはずいるのです。増幅器ぞうふくきもまだうまいところへ調整がいつていません。直ぐ直つてきますよ」

なるほど映像はすこし明瞭度めいりょうどを加えた。テニススコートの棒くいや審判台らしいものが見える。そこへ人影らしいものが。

「人間が通っているぞ」課長が叫んだ。「早く肉眼で運動場を見せ給え」

「これは、こっちのレンズからお覗き遊ばして……」捜査課長ののみもと耳許でダリアの声こゝろがした。

「呀あッ」と課長は慌あわてたが「いやなるほど、よく見えます。——
なあーんだ、例の用務員が本当に通つてやがる」

まず赤外線男ではなかつたので安心した。

「この辺あたりのところですから、さあ誰どなた方も変りあつてスクリーンを覗いて下さい」理学士が器械から離れながら云つた。

「さあ順番に見ようじゃないか」検事が後の方から声をあげた。

ゴトリゴトリと靴音がして、スクリーンの前に観察者が入れ代つているようだった。

「どうも赤外線写真というものは、色の具合が、死人の世界を覗いているようだな」判事さんが眩つぶやきながら視みている。

そのとき真ま暗くらだった室内へ、急に煌こう々こうたる白は光こうがさし込んだ。

「呀あッ！」

「どツどうしたんだ」理学士が叫んだ。

一つの窓のカーテンが、サーツとまくられたのだった。皆の眼は、この眩まぶしい光に会ってクラクラとした。

「いいえ、何でもないので。失礼しました」と、窓のところでダリアの声がした。

「困るじゃないか」深山は云った。

「アノちよつと何だか、あたしの身体になんだか触さわりましたのよ。吃びっくり驚して、窓をあけたんですの」

「ああ、もう出たかッ——」

「赤外線男！」

「窓を皆、明けろッ！」

そのとき白丘ダリアは朗ほがらかな声で云った。

「いいえ、大丈夫ですわ。カーテンを明けてみましたら、帆村さんのお臀しりでしたわ。ホホホ」

「なあーんだ」

一座はホツと溜息ためいきをついた。

「じゃ早くカーテンを下ろしなさい」

「済すみません」

カーテンはパタリと下りた。元の暗闇が帰って来たけれど、皆もろまくの網膜もうまくには白光が深く浸しみこんでいて、闇あんこく黒がぼんやり薄明るく感じた。スクリーンの前では雁金検事が、しきりに眼をしばたたいていた。

ウームというような低い呻うなり声が聞えたと思った。ドタリ……

と、大きな林檎りんごの箱をたおしたような音が、それに続いて起った。

素破すわ、異変だ！

「どツどうした」

「まッ窓だ窓だ窓だッ」

「ランプ、ランプ、ランプ、ランプ！」

さーツと、窓から白光はっこうが流れこんだ。ネオン灯もいつの間にか点いた。

「キヤーツ」と喚わめいてカーテンに縫すがりついたのは、窓のところへ駈かけよったばかりの白丘ダリアだった。床の上には、幾野捜査課長が土のような顔色をし、両りょう眼がんを剥むきだし、口を大きく開けて仆たおれていた。

もう赤外線テレビジョンも何もなかった。窓という窓は明け放された。室内の一同の顔には生色せいしよくがなかった。

「赤外線男！」

「ああ、あいつの仕業しわざだ」

いまにも自分の身体に、赤外線男の猿臂えんぴがムズと触ふれはしないかと思うと、恐ろしい戦慄せんりつが電気のように全身を走った。眼に見えない敵！ そいつをどう防まげばいいのだ。どうして其その魔手ましゅから遁のがれればいいのだ。

そのとき帆村探偵は、一人進み出て、捜査課長を抱かかえ起した。

課長の頭は、ガツクリ前へ垂れた。

「呀あッ、こりや非道ひどい！」

帆村は呟いた。幾野課長の頸の真うしろに一本の銀鍔がプスリと刺さっていた。

一同は吾れにかえると、赤外線男のことを鳥渡忘れて、課長の死骸の周囲に駈けあつまつた。

「延髓を」と突きにやられている……」

「太い鍔だッ」

「指紋を消さないように、手帛でも被せて抜けッ」

「これは抜けますまい」と帆村が云った。

なるほど、力の強い刑事が引張つても抜けなかった。鍔に筋肉が搦みついてしまったものらしい。

「一体これは、どうして調べようか」判事が当惑の色をアリア

りと現わして云った。

「どうも、相手が悪い」と検事が呟いた。

「赤外線男はそれとして置いて、普通の事件どおり、この部屋の中にいる者は、すっかり取調べることにして下さい」と帆村が云った。

そこで係官が代りあつて係官自身と、帆村、深山理学士、白丘ダリアとを調べてみたが、別に怪しい点は何一つ発見されなかった。

結局、赤外線男の仕業ということが裏書きされたようなものだった。流石の帆村探偵も手も足も出せなかつた。

捜査課長の殺害事件は、俄然日本全国の新聞紙を賑わした。

それと共に、赤外線男の噂が一段と高まった。警視庁の無能が、新聞の論説となり、投書の機関銃となり、総監をはじめ各部長の面目はまるつぶれだった。

四谷よつやに赤外線男が出た。三河島みかわしまにも赤外線男が現われたと、時間と場所とを弁えぬ出現ぶりだった。尤もそれは皆が皆、本当の赤外線男とは思えず、一寸話ちよつとを聞いただけで偽赤外線男だと

看破^{かんぱ}出来るようなものもあつた。

帆村探偵は、直接に攻撃されはしなかつたけれど、内心大いに安からぬものがあつた。彼は書齋のソファに身を埋^{うず}めると細巻のハバナに火を点けて、ウツトリと紫の煙をはいた。彼は元々赤外線男などという不思議な生物があるとは信じていなかった。しかしそれには別に根拠があるわけではなかつたのだ。捜査課長の故^こ幾野氏の惨死^{ざんし}事件を考えてみるのに、あれは赤外線男なら勿^{もちろん}論出来ることであるが、それと同時にあの部屋にいた人間にも出来ることではないかと思いかえしてみた。

雁金検事、中河判事——この二人は、まず犯人ではないであろう。彼等の本庁に於ける歴史も功績も古く大きいものだ。

警部、刑事も疑えば疑えないこともないが、日頃知っている仲間だから先ず大丈夫。

熊岡警官はどうだ。これは始めて会った人ではあるが、Y署では模範警官といわれているから大丈夫だろう。但ただいろいろと探偵眼のあるところが、平警官ひらとして多少気に入らないこともないが、一々疑つてはきりがない。

残るは深山みやま理学士だ。これは確かに怪あやしくてもいい人物だ。しかし彼は赤外線男を見たという。赤外線男が二人もあるなら格別、一人なら彼の嫌疑けんぎは薄い。ことに彼は赤外線男に襲撃され、変圧器の上へ抛ほうり上げられていた被害者でもある。感心しない。

然しからば白丘ダリア嬢はどうだ。「赤外線男」というからには、

ダリア嬢では性別が違っている。男が女装しているものとはあの
澆^{はつらつ} 瀨たる肉体美から云つて信じられない。殊^{こと}に課長がやられた
日には、眼を悪くしていた。あのように視力の弱っているのに、
延髓を刺すというような精密正確を要することが出来るであろう
か。

いや凡^{およ}そ、あの部屋にいた連中は皆、闇^{あんこく} 黒の中に沈^{ちんでん} 澱^{えんずい} して
いたのだ。誰も視力を奪われていた。暗闇で延^{えんずい} 髓^{ずい} を刺すという
ことは、誰にも出来ない筈だ。

残る嫌疑^{けんぎしや} 者は自分であるが、これとても同じことが云える。
然らば、誰が課長を殺したか？

ああ、赤外線男！ 貴様はやっぱり存在するの。貴様でなけ

れば、あの殺人は出来ないことにはなるが、貴様は一体何者だツ。

帆村は呻りながらも、まだ何か忘れてしているものがありはしないかと、痛む頭脳あたまをふり絞った。

有るには有る。あの延髓えんずいを刺した鍼はりだ。調べてみると指紋はあつた。しかし細い鍼はりの上のつた幅はばのない指紋なんて何になるのだ。

それから、深山理学士の室で発見された大きい靴跡だ。あれが赤外線男のものとして、背丈を出すと五尺七寸位。これはいい。

次に事務室で盗まれた千二百円だ。赤外線男に金が要いるとは可笑かしい。しかし靴を履はいていたり、黒い洋服のようなものを着ているというからには、矢張り金やっぱが要るのかしら。しかし、その金

をどうして使うのだ。彼自身が握っていたのでは、金は他人の眼に見えないだろうし、第一洋服店の前に立って、洋服を注文したところで、背丈肉付せたけにくづきもわからなければ、店の方でも声ばかりするのでは驚いて、不思議な噂話うわさばなしがパツと拡ひろがらねばならぬ。それも聞えてこないというのは、若もしや赤外線男に手下てしたがあるのではあるまいか。

世間では、新宿のホームから飛びこんで轢死れきしした婦人の身許みもともわからないし、地下ほうむに葬はすった筈はずの死骸ふんしつが紛失ふんしつした不思議さを、今も尚なま覚おぼえていて、あれも赤外線男の仕業しごだろうと云っているよ。うだ。死骸を奪ったのが赤外線男だとすると、それは何のためだ。外国の小説には、火星人が地球の人間を捕虜ほりよにし、その皮を剥はい

で自分がスツポリ被り、人間らしく仮装して吾れ等の社会に紛れまぎこんでくるのがある。しかしあの婦人の顔面かおは滅茶滅茶めちやめちやだった筈だ。婦人に化けたとしても、あの顔をどうするのだ。顔をかくしている婦人なんて印度インドや土耳其トルコなら知らぬこと、この日の本にありはしない。婦人の死骸の行方が判らない限りこの問題は解決がつかない。

それから熊岡警官が轢死婦人のハンドバッグから探し出したフィルムやの焼け屑くずだ。あれは一体何だ。あれが判明すると、婦人の死因は勿論、身許まで解ることだろう。

赤外線男に關係あるかどうかは二段として、この婦人の問題を解いて置くことは、あまり困難でもない。その上に、隅田梅子すみだうめこと

いう婦人と轢死婦人と同じ衣類所持品をもっていたという暗合、それから黒河内子爵くろこうちしやく夫人が、行方不明で、今も尚生死が知れぬが、あの少し前に、乱歩らんぽ氏の「陰獣いんじゆう」のことを言い出したという事——よし、明日から、この方面を徹底的に調べてみよう。

帆村は、こう考えると、静かに椅子から立ち上つて卓子テーブルの灰皿へ長くなつた白い葉巻の灰をポトンと落した。

そのとき卓上電話がジリジリと鳴った。帆村はキラリと眼を輝かすと、電話機を取上げた。

「帆村君を願います」せいきゆう性急な声が聞えた。

「帆村は私ですが、貴方は？」

「ああ、帆村君。私です。捜査課長の大江山警部ですよ」それは

故幾野課長の後を襲った新進しんしんの警部だった。

「大江山さんですか。また何かありましたか」

「ええ、あつたどころじゃないです。唯ただいま今総監閣下が殺害さつがいされました」

「ナニ総監閣下が……？ 本当ですか」

「困ったことですが、本当です」

「一体どうしたのです。どこでやられたのです」

「今日は御案内したとおり、深山理学士の赤外線テレヴィジョン装置を、本庁の一室にとりつけたのです。それは警戒を充分にして、この装置で丹念たんねんに赤外線男を探しあてようというのです。

深山さんに白丘さんと、お二人に来て貰って取付けました。実験

は午後三時から開始するつもりで、貴方あなたにもお出で願うよう申上げて置きましたが、先刻さつき総監閣下が急に見たいと仰おっしゃ有るので到頭うとうご覧に入れちまったのです」

「そりや拙ますかったですネ」と帆村は腹立たしそうに云った。

「私も始めはお止めとしたのです。しかし閣下は他出そとでされる約束があつて、その日の三時にはご覧らんになれないのです。それで強しいてというお話ですし、一方例の用意もありまして大丈夫だと思つたのです」

例の用意というのは、深山理学士と白丘ダリア嬢には秘密で、この室内の一隅に小さい赤外線発生灯はっせいとうを点じ、隠し穴を通じて隣室からこの室内を活動写真に撮とる。つまり肉眼で見えぬ光線を

室内に送って置いて、室内の人々の動静を赤外線映画に収めてしまふ。斯うすれば、その中で怪し気な行動をする者がフィルムの上に映つた筈だから、後で現像すればそれと判る——こんな仕掛けを予め作って置いたのである。しかし総監閣下が犠牲になられたのでは、何にもならない。本庁の連中の愚鈍さに、帆村は呆れる外なかつた。

「で、閣下がお入りになつてから、フィルムを廻したのですネ」

「そうです。うまく撮つたつもりです。——だが閣下は殺害されました。兇器は鍼で、同じように延髄を刺しつらぬいています」

「現像は……」

「今やっています。直ぐこれからおいで願ひたいのです」

「ええ、参ります」

帆村は憂鬱な返辞をした。

駆けつけてみると、本庁は上を下への大騒ぎだった。殺られる人に事欠いて、総監閣下が苟めの機会から非業の死を遂げたというのだから、これは大変なことである。

「どうです。フィルムの現像は出来ましたか」帆村は課長に会うと、真先に訊いた。

「出来たのですが……」

「どうしたんです？」

「駄目でした。赤外線灯の前に、どういふものかドヤドヤと人が立って、肝心のところは真暗で、何にも写ってやしません」

課長は、めんぼく面目なげにうつむ下俯いた。

「深山氏とダリア嬢は、調べましたか」

「今度こそはというのでよく調べました。身体検査も百二十パーセントにやりました。ダリア嬢も気の毒でしたが、婦人警官に渡して少しひどいところまで、残る限くまなく調べ、ほうたい繃帯もすっかり取とりはず外させるし、眼鏡もとられて眼瞼まぶたもひっくりかえしてみるというところまでやったんですが、何の得うるところもありません」

「ダリア嬢の眼はどうです」

「ますますひどいようですよ。左眼さがんは永久に失明するかも知れません。右眼も充血がひどくなっているそうです」

「ダリア嬢は眼のわるい点でいいとして、深山氏の行動に不審は

なかつたんですか」

「ところが深山氏は閣下^{かくげ}にいろいろと詳しく説明^{くわ}していた^{さいちゆ}最^{さい}中^{ちゆう}なのです。深山氏が喋^{しゃべ}っているのに、閣下はウーンといつて^{たお}仆^{たお}れられたのです。深山氏を疑うとなれば、喋^{しゃべ}っていないながら手を動かして鍼^{はり}を突き立てるといふことになりましたが、これは実行の出来ないことですよ」

「すると二人の嫌疑は晴れたのですか」

「まあ、そうなりますネ。二人もこれに懲^こりて、今後はどんなことがあつても、あの装置を働^{あんしつ}かす暗室^{あんしつ}内へは行かないと云つていますよ」

「では犯人は一体誰^{たれ}なんです」

「赤外線男——でしようナ」

「課長さんは、赤外線男だといって満足していられるんですか」

「今となつては満足しています。昨日までは稍やや信じなかつたですが、今日という今日は、赤外線男の仕業しわざと信じました。この上は、私どもの手で、あの装置を二十四時間ぶつ通しに運転して、赤外線男を発見せずには置きません」

「しかし、レンズは室内を睨にらませたがいいですよ。あの室内に赤外線男がウロウロしているのではネ」

帆村は、課長の勇猛心に顔負けがして、ちよつと皮肉ひにくを飛ばした。

その次の朝のことだった。

帆村莊六は早く起き出ると、どうした気き紛まれか、洋服筆筒きまぐからニツカーと鳥打帽子とを取り出して、ゴルフでもやりそうな扮ふん装そになった。

しかし別にクラブ・バッグを引張ひり出っすわけでもなく、細い節ふ竹しだけのステツキを軽く手にもつと、外へ飛とび出した。忌いわしい第一、第二の犠牲者を、昨日一昨日に送うつたとは思えないほど、麗うら

かな陽春の空だった。

彼は先ず、警視庁の大きな石段をテクテク登っていった。

「どうです。何か見付かりましたか」彼は捜査課長の不眠に脹れぼったくなくなった顔を見ると、斯う声をかけた。

「駄目です」と課長は不機嫌に喚いてから、「だが、昨夜また犠牲が出たんです。今朝がた報せて来ました」

「なに、又誰かやられたんですか」

「こうなると、私は君まで軽蔑したくなるよ」

「そりや、一体どうしたというのです」帆村は自分でもなにかハツと思ひあたることがあるらしく、激しく息を弾ませながら問いかえした。

「浅草の石浜いしはまというところで、昨夜の一時ごろ、男と女とが刺し殺された。方法は同じことです。女は岡見桃枝おかみももえという女で、男というのが……」

「男というのが？」

「深山みやま理学士なんだッ。これで何もかも判らなくなってしまった」

課長は余程よほど口惜しいものと見えて、帆村の前も構わず、子供のようなみだな涙をポロポロこぼ滾こぼした。

「そうですね」帆村も涙を誘さそわれそうになった。「じゃ貴方も深山理学士は大丈夫といいながら、一面では大いに疑うたがっていたんですネ」

「そりやそうだ。今となって云つても仕方が無いが、ひよつとす

ると、赤外線男というものは、深山理学士の創作じゃないかと思つていた」

「大いに同感ですな」

「視^みえもせぬものを視えたといつて彼が騒いだと考へても筋道が立つ。——ところが其^その本人が殺されてしまつたんだから、これはいよいよ大変なことになつた」

「僕は兎^とに角^{かく}、見に行つて来ます。あれは日^{にほん}本^つ堤^{つみ}署^{しよ}の管^{かん}内^{ない}ですな」

課長は黙つて肯^{うなず}いた。

警察へ行つてみると、現^{げん}場^{じやう}はまだそのままにしてあるとい

うことだつた。場所を教^{おし}えて貫^{もら}うと、彼は直ぐ警察の門を飛び出

した。

そこから、桃枝の家までは五丁ほどで、大した道程ではなかつた。彼は捷徑ちかみちをして歩いてゆくつもりで、通りに出ると、直ぐ左に折れて、田中町たなかまちの方へ足を向けた。震災前しんさいぜんには、この辺は帆村の縄張りなわばだったが、今ではすっかり町並まちなみが一刷新いつしんしてどこを歩いているものやら見当がつかなかった。どこから金を見つけて来たかと思うような堂々たる五階建のアパートなどが目の前にスツクと立って、行く手ゆくてを見えなくした。彼は忌々いまいましそうに舌打ちをして、大田中アパートおおたなかにぶつかると、その横をすりぬけようとした。そしてハツと気がついた。

見ると、アパートの高い非常梯子ひじょうばしごに、近所の人らしいのが十

四五人も載^のつて、何ごとか上と下とで喚^{わめ}きあっているのだ。

「どうしたんです」

帆村は道^{みち}傍^{そば}に立っている人のよさそうな内儀^{おかみ}さんに訊^{たず}ねた。

「なんでするか、どうも気味の悪い話なんでござんすよ」と内儀さんは細^{まゆ}い眉^{しか}を顰^{しか}めると、赤い裏のついた前^{まえ}垂^{だれ}を両手で顔の上へ持つていった。「あのアパートの五階に人が死んでいるんだつて云いますよ。そういえば、このごろ、近所の方が、何だか莫迦^{ばか}に臭^{くさ}い臭^{くさ}いと云ってましたが、その死骸^{しがい}のせいなんですよ。まあ、いやだ」

内儀さんは、ゲツゲツと地面へ唾^{つば}をはいた。

「じゃ、よっぽど永く経^たった死骸^たなんですネ」

「そうなんだそうですよ。開けてみると、押入れの中にそれがありません。ましてネ、もう肉も皮も崩れちゃって、まッ大変なんですって。着物を一枚着ているところから、女の、それも若いひとだっってえことが判ったって云いますよ」

「ナニ、若い女の屍体？」 帆村はドキンと胸を打たれた。そうだ、今日は探しに歩こうと思っていたあの女の屍体かも知れない。日数が経っているところから云っても、これは見遁みのがせないぞと、心の中で叫んだ。

「そこは、その女の人の借りている室なんですか」

「いいえ、そうじゃないですよ。あすこは潮うしおさんという若い学生さんが一人で借りているんです。ところが潮さん、この頃ずっと

見えないそうで……」

「その潮さんというのは、若しや背丈の大きい、そうだ、五尺七寸位もある人でしょう」

「よく知ってますね」と内儀さんは、はだけた胸を掻き合わせながら云った。「ちよいといい男ですわヨ、ホツホツホ」

帆村は苦笑した。

「あらツ、向うから潮さんが帰ってきちやったわ」

「えッ」と帆村は駭おどろいて、内儀さんの視線の彼方を見た。

「まあ大変顔色がわるいけれど、あの人に違いない……」

その言葉の終らないうちに、帆村は向うから飄々ひょうひょうとやってくる潮らしき人物の袂たもとを押おさえていた。

「潮君」

「呀あッ」

青年は帆村の手をヒラリと払つて、とツとと逃げ出した。帆村はもう必死で、このコンパスの長い韋駄いだてん天を追駈おいかけた。そして横丁を曲つたところで追付いて、遂ついに組打ちが始まつた。そのとき青年の懐ふところ中から、コロコロと平べつたい丸まる缶かんのようなものが転げ出て、溝みぞの方へ動いていった。

「ああ——それは……」

と青年の腕が伸びようとするところを、帆村は懸命に抑えて、うまく自分の手の内に収めた。そこへバラバラと警官と刑事とが駈けつけたので、帆村は間違われて二つ三つ蹴ぞんられ損をしただけ

で助かった。彼が手に入れたものは一巻のフィルムだった。それも十六ミリの小さいものだった。

ああ、フィルムといえば、身許不明の轢死婦人のハンドバッグに、フィルムの焼け屑やくずがあつたではないか。

帆村は、深山理学士と情婦の桃枝との殺害場所を点検すると、大急ぎで日本堤署へ引かえした。その頃には、本庁からも予審判事が駆けつけていたが、もう何事も観念したものと見え、潮十吉という青年は、墓場から婦人の死骸を掘りだして遁にげたことを白状していた。しかし婦人が何者であるか、彼との関係はどうなのであるかについては中々口を緘つぐんで語らなかつた。フィルムのことは意外にも、深山理学士の室から奪つたものだと言明したが、

事務室から千二百円の大金を盗んだことは極力否定した。

あとは本庁で調べることとし、意気昂然たる老判事は、潮十吉と帆村とを伴つて、警視庁へ引上げた。

今朝の不機嫌をどこかへ落してしまつた大江山捜査課長の前に、帆村探偵は手に入れた一卷のフィルムを置いて、いろいろと打合わせをした。

「じゃ、午後の五時に、本庁の第四映画検閲室で試写ということにするのですね」

「そう決めましょう。じゃ万事よろしく」捜査課長は、何が嬉しいのか、帆村の手をギュツと握つた。

帆村は一名の警官と連れ立って、くろこうちししやく黒河内子爵を訊ねた。子爵の代りに、例の白丘ダリアが出て、子爵は重じゅうたい態で、看護婦が二人もついている騒ぎだからと云った。

「実は、失踪された子爵夫人のことに関し、是非ご覧願いたい映画の試写があるのですが、それは困りましたネ」と帆村は長くもないあご頤を指先でつまんだ。

「映画ですか。あたし、代りに行きましようか」

「そうですか。じゃ子爵の御了解ごりようかいを得て来て下さい。よかつたら御一緒に参りましょう」

「ええ、いくわ」

ダリアは、まだ繻帯のとれぬ大きな頭を振り振り奥に引きかえしたが、直ぐすコートと帽子とを持ってあらわれた。

「さあ、お伴しますわ」

三人が警視庁についたのは、すこし早すぎた。

「ねえ、ダリアさん。まだ四十分もありますよ」

「退屈ですわネ」

「ちよつと永いですネ」と帆村は云った。「そうそう、この中に面白いものがありますよ。警官に射撃を訓練させるために、室内

射的場しやてきばがつくつてあります。僕たちが行つても構わないのです。行つてみませんか」

「射的ですよ？ あたし、これでも射撃は上手なのよ」

「じやいい。行つてみましょう」

呑気のんきせんぼん千万にも帆村は、ダリアを引張つて、警官の射的室へ連れて来た。そこは矢場のように細長い室だが、手前の方に、拳ピスト銃ルを並べてある高い台があつて、遥はるか向うの壁には、大きな掛か図けずのような的まとがかかつていた。その的まとというのは、白い紙の上に、水珠みずたまを寄せたように、茶碗ちやわんほどの大きさの、青だの、赤だの、黄だの円まるが、べた一面に描いてあつて、その上に5とか3とかいう点数が記してあつた。

「僕やってみましようか」帆村は気軽に拳銃ピストルをとって、覗ねらいを定めると、ドーンと一発やった。3点と書いた大きな赤あかまる円に、小さい穴がプスリと明いた。

「どうぞです。相当なものでしょう」

そういいながら、彼は次から次へと、あまり点数の多くない色とりどりの円を、撃ちぬいていった。

「今度は、ダリアさん、やってごらんなさい」帆村は拳銃を彼女の方に薦すすめた。

「エエ——」とダリアは答えたが、「あたし、よすわ」とハツキリ云った。

「そんなことを云わないで、やってごらんなさいな」

「だってあたし……あたし、眼が悪くて駄目なんですわ」

そういつてダリアは、カラカラと男のような声で笑った。

まだ時間はあつたから、二人は食堂へ行つた。そこでオレンジ・エードを注文して、むぎわら麦藁くだの管でチュウチュウ吸つた。

「警視庁なんてところ、随ずいぶん分開けてんのネ」ダリアは、帆村をすつかり友達扱いにしていた。

「それはそうですよ。あなた貴女みたいな方をお招きすることもありませんのでネ」

「だけど、このオレンジ・エード、なんだか石鹼くさいのネ。あたし、よすッ」

半分ばかり吸つたところで、ダリアは吸すい管くだを置いた。

そんなことをしている裡うちに時間が経って、警官がわざわざ二人を探しに来た程だった。

階段を地下へ降りて、長い廊下をグルグル廻ってゆくと、大變天井の低い暗いところへ出た。例の赤外線男が出て来そうな気配けはいだったが、しかし仄暗ほのぐらいながら電灯がついているから停電でもない限りま先ず大丈夫だろう。

映画検閲用の試写室は、思いの外ほか、広かった。壁は一様にチョコレート色に塗ってあり、まるで講堂のような座席が並んでいた。正面には二メートル平方位のスクリーンがあつた。

もう七八人の人が入っていた。雁金検事、中河判事、大江山捜査課長の顔も見えた。

そこへ別の入口から、警官に護られて、潮うしお十じゅう吉きちが手錠てじょうをガチャガチャ云わせながら入つて来て、最前列さいぜんれつに席をとつた。そこは、帆村探偵と白丘ダリアとが並んである丁度ちやうどその横だつた。

「もうこれで皆さん全部お揃いですか」

警官の映写技師が、一番後方から声をかけた。

「うん、揃つたぞ。もう始めて貰おうか」

帆村のうしろにいた捜査課長が声をかけた。

「じゃ始めます。あれを演やる前に、一つ調子をつけるために、実じ写つものしゃを一巻写してみます。ウィーンっしやの牢獄です」

スクリーンの上へ、サツと白い光が躍ると、室内の電灯がパツ

と消された。一座はハッと緊張した。まずスクリーンの明るさで、室の中は暗闇だというほどではないが、しかし椅子の下、後方の両脇などには、小暗いこぐら蔭があつた。それにこうして平然と、画面に見入みいつていていいものかしら、赤外線男の出てくるには、屈くつきよ強うな地下室ではないか。

しかし一巻の映画は、極めて短いものであつた。そしてまだ映画がうつつてゐるのに、早くも電灯がパツと明るく室内を照らした。

「さあ、いよいよこの次だ」

「一体どんな映画なのだろう」

人々は胸のうちに、あれやこれやと想像をめぐらせた。

「私を外へ出して下さい」潮十吉は隣りに遊んでいる警官に訴えた。

「いや、ならん」

警官の声はあっけなかつた。

さあ、いよいよ問題の映画が写し出されようとしている。潮十吉が、深山理学士のところから奪つて来たフィルムはこれだ。そして身許不明の轢死婦人のハンドバッグの底に発見せられたのも、^{みもと}矢張り同じフィルムだつた。この映画が写し出されたが最後、^{やは}意外なことが起るのではないか。既に靴の跡によつて嫌疑の深い潮十吉であるが、この一卷の映画によつて、彼の正体が暴露するのではあるまいか。赤外線男は潮十吉か。或いは赤外線男の合棒^{あいぼう}

でもあるか。

カタリと音がして、スクリーンの上に、青白い光こうぼう芒が走った。こんどは十六ミリであるから、画面はスクリーンの真中まんなかに小さくうつった。

「ああ、これは……」

「ウム……」

画面の展開につれ、人々は苦しそうに呻うなった。誰かが、いやらしい咳せきぼら払いをした。

いまスクリーンに写っている画面には二人の人物が出ている。

「ああ、こっちは、潮十吉だな」帆村は、あえぐように叫んだ。

「ああ、あれは伯母おば様ですわ。伯母様に違いないわ。だけど、ホ

ホ……まッ……」

といったきり、白丘ダリアは口を噤つぶんだ。

さて画面に、それから如何なる情じょうけい景が展開していったか、その内容についてはここに記しるすことが許されぬ。しかしそれは密閉されたる室のうちで演じられている怪しげなる戯たわむれだった。斯かかる情景は人目のつかぬ真夜中に行うべきものだと思ふのに、それがまことに明るい光の下に於て行われている。そのいぶかしさは、尚なおも仔細に画面を点検すれば、次第に明めいりよう瞭りようだった。それは赤外線せきがいせんで撮影した活動写真であつたのだ。

恐らく場面は、真夜中であつたろう。真暗な室の中に、この場のことは演ぜられたのに違いない。それにも係かかわらず、この室にど

ここからか赤外線を当て、それを赤外線の活動写真に撮影したのだ
つた。そして人物は子爵夫人黒河内京子と青年潮十吉！

さてこの呪うべき撮影者は、一体誰であるか。

潮はこの映画の写っている間は、頭を下げ顔を掩うたまま、一
度も首をあげようとはしなかった。映画が終つて、一座の深い溜
息と共に、パツと電灯がついた。

「潮」大江山課長は声をかけた。「この撮影者は誰か」

「あいつです」青年はグツと首をもちあげた。「あいつです。深
山榎彦——彼奴がやつたんです。子爵夫人と僕とは間違つたこ

とをしていました。深山は而も夫人に恋をしていたのです。彼奴
は私達の深夜の室をひそかに窺つて暗黒の中にあの赤外線映画を

とつてしまつたんです。深山はそれをもつて可憐なる子爵夫人を幾度となく脅きようはく迫おそしました。一度は夫人があのでフィルムの一いつた端たんを奪つたのですが、それは焼いてしまいました。バッグの底にのこつているフィルムの焼け屑は、あれだつたんです。鬼のよ
うな深山は、赤外線利用の技術を悪用して、それまでにも、人の
寢室を密ひそかに写真にとつては、打ち興じていたという痴漢ちかんです。
しかし飽あくまで夫人に未練みれんをもつ彼は、夫人が意に従わないとき
はあの映画を公開するといつて脅おびやかしたのです。夫人は凡すべてを觀
念し、とうとう新宿のプラットホームからとびこまれたのです。
これも皆、深山の仕業です。夫人は身許みもとのわかることを恐れて、
いつもあのような服装を持って居られました。あれは最も平凡な、

世間にザラにある持ちものを集められたのです。いわば月並つきなみの衣類なり所持品です。それがうまく効こうを奏して隅田すみだ氏の妹と間違えられたのです。顔面の諸もろに砕くだけたのは、神も夫人の心根こころねを哀あわれみ給たまひてのことでしょう。僕は復讐ふくしゅうを誓ちかいました。そして深山の室むろに闖ちん入にゅうして、あのフィルムを奪だつ回かいしたのです。彼奴かやつを探しましたが、どうしたものかベッドはあつても姿はありません。早くも風を喰くらつて逃げてしまつた後あとだったので。それから僕は……」

このとき白丘ダリアは、先刻さつきから耐たえていた尿意にょういが、どうにももう持ちきれなくなつた。その激しきは、いまだ経験したことが無い位くらいだつた。彼女は慌あわてて試写室を出ると、薄暗い廊下に飛

び出した。見ると、直ぐ間ま近ぢかに、赤い灯とも火びが点ともつていて、それに「便所」という文字が読めた。

彼女は、飛び立つ想いで、その扉ドアを押した。扉があくと、そこには清潔な便器が並んでいる。洋よう風ふう廁かわだつた。ダリアはその一つに飛びこんで、パタリと戸を寄せると、氣持のよい程、充分に用を足した。

大きい鏡があつたので、ダリアはそこで繻ほう帶たいを氣にしなから、
りゆうさん 硫 酸 の焼け跡のある顔へ粉こな白おしろい粉いを叩いた。そして入口の扉
 を押して、廊下に出た。その途端とたんにダリアはハツと駭おどろいて、

「呀あッ」

と声をあげた。

そこには思いがけなくも、帆村を始め、捜査課長、検事、判事など十四五人が、ダリアの方に身構えみがまをしていた。

「まあ、どうしたんです。帆村さん」

ダリアの救いを求めた帆村は、最早もはや、先刻しやてき、射的しやてきで遊んだ帆村とは別べつじん人のようであつた。

「白丘ダリアさん。それは今大江山捜査課長から説明して下さい
でしよう」

げんか
言下に大江山課長はヌツと前へ出た。

「白丘ダリア。いま汝なんじを逮捕する」

「あたしを逮捕するつて、冗談はよして下さい」

「まだ白っぱくれているな。吾々の眼はもう胡魔化ごまかされんぞ。白

丘ダリアが嫌いだったら、『赤外線男』として汝を捕縛する。それッ」

ワツと喚いて、選りぬきの腕に覚えのある刑事が、ダリアの上に折り重なった。もう遁げる道もなければ、方法もなかった。

「赤外線男」は、それっきり自由を奪われてしまった。

* * *

事件が一段落ついた後の或る日、筆者は南伊豆の温泉場で、はからずも帆船探偵に巡りあった。彼は丁度事件で疲れた頭脳を鳥渡やすめに來ていたところだった。仄かに硫黄の香の残っている浴後の膚を懐しみながら、二人きりで冷いビールを酌み交わした。そのとき彼の口から、この事件の一切の顛末を聞

くことが出来たのだった。彼は中学校で同級だったときのあの飾り気のない口調くちようで、こんな風に最後の解決を語った。

「『赤外線男』が白丘ダリアといったんでは、警官の中にも本気にしない人があった位だよ。しかし要点を云うとネ、元々『赤外線男』という名称は、殺された深山理学士がつけたものなのだ。

彼は『赤外線男』を見たといつて、いろいろな話をしたが、本当は一度も見たわけじゃなかったのだ。それは彼が便宜べんぎじよう上拵しらえた創作的観念であつて、実在ではなかった。

何故そんなことをやったかというところ、始めはあの新説で世間をあ呀あツと云わせて虚名きよめいを博しよう位のところだったらしいが、い

よいよというときには事務室の金庫から彼が消費つかいこんだ大金おおがねの穴埋あなうめに、『赤外線男』を利用したわけだった。研究室が潮に襲われると、逸いちはや早く彼は避難したのだったが、そのチャンスを巧くとらえて、潮のかえった後の自室や事務室を散々自分で破壊してあるき、自ら変圧器の上にあがると、自分の身体を縛ったのだ。智恵のある人間には訳のないことだ。

しかしこの犯行の裏には三人の女が隠れているんだ。そういうと不思議に思うだろうが、一人は情婦じょうぶという評判の女・桃枝だ。この女には秘密に大分みつ貢いだものらしい。金庫の金に手をかけたのも、この女のためだ。

もう一人の女は子爵夫人京子だ。これには潮が云ってたように

色ばかりではなく、むしろ慾の方が多かったのだ。夫人と潮との秘交ひこうを赤外線映画にうつしたのは、夫人に挑むいどことよりも莫大ばくだいな金にしたかったのだ。もし夫人が相当の金を出したとしたら、深山は事務室の金庫を破る必要もなく、『赤外線男』をひねり出す苦勞もしないで済すんだことだろう。しかし京子夫人にそんな莫大の金の都合はつかなかつた。夫人は死を選んだのだ。

そこへ、もう一人の女性、白丘ダリアという女がいけなかつた。これは先天的に異常性を備えた人間だつた。左の眼と、右の眼と、視る物の色が大変違うなんて、ほんの一つのあらわれだ。あの狒ひ々ひのような大女は、自分と反対に真珠のように小さい深山先生に食慾を感じていろいろと唆そそのかしたのだ。『赤外線男』も、ダリア

から出たアイデアだったかも知れない。

しかしダリアの使囈しそうに乗った理学士も、金庫の金を盗んだり、それからダリアの喜びそうもない情婦じょうふ桃枝のことを手紙から知られると、すっかりダリアに秘密を握られてしまった恰好かつこうになった。其その後に来るもの——それを考えると彼は安閑あんかんとしていられた。そこで深山は、思い切つて、ダリアが同じ室に寝泊りしているのを幸さいわい、水素瓦斯ガスを使って睡っている彼女を殺そうとしたが、水素乾燥用の硫酸の壇が爆発してダリアに目を醒さまされ、不成功に終つてしまったのだ。

ダリアはこの事を勿論もちろん感づいた。しかしだネ、彼女は悪魔だけに賢明だった。事を荒立あらだてる代りに、一層いっそう深山の弱点を抑え

て、徹底的にこれを牛耳ぎゆうじつてしまふ考えだつた。ところがあの騒ぎによつて彼女の身体に大きな異変が起つた。それは飛んで来た硫酸に眼を犯され、右眼うがんは大した損傷そんしょうもなかつたが、左眼さがんはまるで駄目になつた。結局右眼一つというようになつてしまつた。しかし左眼が潰つぶれたことが異変というのじゃない。左眼が潰れたために、残る一眼が急に機能が鋭くなつたんだ。左右の肺の一つが結核菌に侵おかされて駄目になると、のこりの一方の肺が代償だいしょうとして急に強くなり、一つで二つの肺臓の働きをするなどということ、医学上よく聞くことだ。それと似て、ダリアは左眼の明めいを失うと同時に、右眼の視力が急に異常な鋭敏さを増加した。元々ダリアの右眼は、左眼よりも物が赤く見えるといつ

ていたが、赤い光線を感じずる神経が発達していたんだ。そんなわけだから、一いちが眼がんになつて異常な視神経の発達により、普通の人には到底とうてい見えない赤外線までが、アリアリと彼女の網もうまく膜まくには映えいずるようになったのだ。普通の人が暗闇と思うところでも、ハッキリ視みえる。——この異常な感覚を自覚したときのダリアの狂き喜ぎぶりようきは、大変なものだったろう。しかしその狂喜は、同時に彼女の破滅を予約したものでもあつた。ダリアは悪魔になりきつてしまった。殺さつじん人いん淫らん楽らく者しゃという恐ろしい犯罪者に墮おちたのだ。そして赤外線が視えるということが、彼女を裏切つて秘ひみつ密ばくろ曝ばくろ露ろの鍵かぎにまでなつてしまった。それは後の話だがネ」

そういつて帆村は、何か恐ろしいことでも思い出したらしく、

大きい溜息をつくくと、ビールを口にもって行って、琥珀色の液体をグーツと呑み乾した。筆者は壇をとりあげると、静かに酌いでやった。

「それからあの殺人騒ぎだ。暗闇の中に、次から次へ起る恐ろしい殺人事件。疑いは一応もつてみても、眼のわるいお嬢さんに、そんな芸当が出来ようとは誰も思っていないかった。一方『赤外線男』という『男』の観念がすっかり普及してお嬢さんに眼をつけることが阻害された。誰がああ暗黒のなかで、選りに選んで非常に正確を要する延髓の真中に鍼を刺しこむことが出来るだろうか。『赤外線男』という超人でなければ、到底想像し得られないことだった。ダリア嬢は、然りその超人的視力をも

つ『赤外線女』だったんだ。これはあとで判ったことだけれど、彼女はあの銀鉞ぎんぱりをシャープペンスルの軸じくの中に隠して持っていたのだった。

これに対して僕の探偵力は、全く貧弱ひんじやくなものだった。どう考えていっても、『赤外線男』という超人を肯定するより外ほかに仕方がなくなるのだ。僕はそんな莫迦ばか気げたことがと排斥はいせきしていたのが、そもそも大間違いではなかったかと考え直し、それからもう一度一切の整理をやり返すと、始めてすこし事情が判つて来た。『赤外線男』が殺人をやるようになったのは極ごくく最近のことだ。以前おいに於ては『赤外線男』の呼び声は高かったにしろ、殺人事件はなかった。そこに何物かがひそんでいると気が付いた僕は、殺

人事件の発生が、ダリアの一眼失明を機会にして其の以後に連続して行われたということを見つけた。同時に探索の結果、ダリアの両眼の視力異常についても聞きこむことが出来た。よし、それなれば、何としても化けの皮を剥いでみせるぞ。そういう意気ごみで、僕はダリアに近づくと、大変心安くなった。折しも幸運なこと、深山の写した子爵夫人と潮との秘交の赤外線映画が手に入ったので、そこにチャンスをつかむ計画を樹てた。僕は手筈をきめて、ダリア嬢を警視庁に呼び出したわけだった。

最初の計画は、残念ながら失敗に近かった。それは庁内の警官射的場で、青赤黄いろとりどりの水珠のように円い標的を二人で射つことだった。僕はドンドン気軽に撃って、彼女にも撃た

せようとしたが、ダリアは早くも危険を悟さとつて拳銃ピストルをとりあげようとはしなかった。若もしあの場合、彼女も射撃を始めたとしたら、必ずのつびきならぬ証拠が出来る筈だった。それはあの色とりどりの円い標的の間に残る白い余白には、あの裏面から赤外線みやまで照明している深山の別個の標的があったのだ。彼女は赤外線も赤い色も判別する力はない。それは赤外線も、吾々が赤を識別できると同様、アリアリと眼に映うつるからだ。しかし彼女は危険を感じて、吾々の眼には見えない赤外線標的を撃つことから脱のがれた。しかし射撃を拒こぼんだということが、僕の予想を大いに力づけて呉れる効能ききめはあった。

さて、最後のトリック——それには鬼才きさいダリア嬢も見事に引つ

懸つてしまった。それはすこし下卑げびた話だ。けれども、あの便所の一件だ。例のフィルムの映写中に彼女は激しい尿意によういを催もよおしたのだった。それは勿論、すこし前に食堂で彼女が飲んだオレンジ・エードに、一服盛つてあつたというわけサ。映画が終るや否いなやダリア嬢は気が気でなく廊下へ飛び出した。もうこれ以上我慢をすると、女の身にとって顔から火の出るような粗相そそうを演ずることになる。彼女は極度に狼狽ろうばいしていたのだ。暗い廊下の向うを見ると、嬉しやそこには『便所』と書いた赤い灯あかりがついている。彼女は扉ドアを押して飛びこんだ。果してそこには奥深く便器が並んでいた。彼女は用を足した。しかし茲ここに彼女は、とりかえしのつかない大失敗をしたのだった。

それは、この『便所』と書いた赤い灯あかりは、普通の視力をもった人間には、到底とうてい発見することの出来ない光だったのだ。つまり赤外線灯で『便所』という文字を照していたのだ。吾々のようなものならば、その前を無造作むぞうさに通り返してしまふ筈だった。赤外線の見える女の悲しさに、ダリア嬢はついそのような灯の下をくぐってしまったのだ。その場の光景は予て張番をさせて置いた監視員によって、すっかり見とどけられてしまった。とうとう異常な視力の持ち主は化の皮を剥がれてしまったのだ。流石さすがのダリア嬢もこうなつては策の施ほどこしようもなく、とうとう一切を白状してしまつた。『赤外線男』——いや『赤外線女』の事件は、ざっとこんな風だった」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1933（昭和8）年5月号

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2002年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤外線男

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>